

私の修業時代

筒井義郎

甲南大学を退職するにあたって、甲南大学経済学会より、エッセイを書くようにお勧めをいただいた。素晴らしいお申し出に感謝する次第である。この機会をとらえて、自分が歩んできた道を振り返り、総括することで、今後の人生を考えていきたい。ただし、時間の関係で、ここでは、生まれてから経済学研究者になるまでの道筋だけを語ることにしよう。経済学研究者としての歩み、そして、現時点で考えていることについては、またの機会にまとめたい⁽¹⁾。本稿は個人の体験をつづるものであるが、私が学んだ当時の経済学は現在とはかなり違っており、その当時の記録としての意味もあれば幸いである。なお、本稿には、いろいろな記憶違いや思い違いが含まれている可能性がある。ご寛恕を乞う次第である。言うまでもないが、いろいろなことに関する評価は、私の主観に基づいた受け止め方を述べており、必ずしも当時の客観的な評価ではない。

これまでの私の人生と現在

これまでの私の人生を振り返ると、無から点になり、子供の世界を過ぎて大人に育ち、社会の構成員、具体的には経済学研究者として活動してきたわ

(1) 現時点で経済学や学問について考えていることは、2019年12月21日に神戸金融研究会で発表する機会があった。また、研究半生については、2010年3月25日のMEW・還暦記念コンファランスで報告の機会があった。

けだ。中学2年ごろまでは純真な子供であり、その後の高校・大学期は大人になるための模索の時期、そして大学院での修業時代を経てプロの経済学研究者として35年ほど活動し、現在に至る。経済学研究を始めるまでは、精神世界で生きる若者であり、知ることが喜びであり、役に立つことには無関心だった。そのころはいろいろな本を読んだが、プロになってからはマンガ以外は読まなくなった。

プロの経済学者は、経済学が定めた枠組み・分析方法に沿って問題を考える。実は経済学の前提について分からない（知らない）ことが多いのに、その前提を認めている人（経済学者）の集団が「正しい」と認めるだろうことを探す。つまり、決められたルールの下でのサッカー競技をしているようなものだ。ルールが決まっているので、研究者のランク付けさえも可能である。年間ゴール10回とか。将棋とマージャン、柔道とボクシングでは、異競技間格闘は普通しない。将棋とマージャンでは「知見」が違って、それぞれにプロがいる。社会科学は、もともと対象分野で棲み分けていた。経済学は経済、政治学は政治、法律学は法律、社会学は社会（これはちょっと微妙だが）、心理学は心理といった具合に。対象が違えば、他の分野の成果に口を出せず、みんな、俺が偉いと言える。今、この禁を犯しているのが経済学だ。経済学は効用最大化行動という枠組みで、いろいろな人間行動の説明にのりだし、犯罪、教育、結婚、差別といった多様な現象に独自の説明を展開している。学会や学術雑誌が違うので、直接の衝突は避けられているという状態だ。それにしても、両方の分析結果を目にすれば、どちらが正しいのが当然問題になるはずだ。

これに対して、アマチュアの研究者というものが可能であれば、その人は、学界のルールに縛られず、むしろルールにも疑問の目を向けて、自分なりに良いと考えるルールを採用するだろう。その人にとって重要なのは、社会（他人）に役に立つことではなく、自分の人生を生きるための答えを得るこ

私の修業時代

とである。社会にとっては無価値であるから無報酬であり、それで生活はできないが、自分にとって最重要な問題の解決を目指す。

私はプロの研究者として問題があった。自分の興味・疑問を考えるだけで、文献から学ぶことをしなかった。分析方法は我流で、アナだけだった。バランスが悪く、独りよがりだった。その結果、学術的な知見への貢献はわずかだった。プロの研究者としては欠陥だらけだが、好意的に見れば、私はアマチュアの研究者であり続けたのかもしれない。

大学という環境を去るにあたって、現在、いろいろな問題が目の前で渦巻いている。その多くは経済学と他の学問分野との境界領域にあるようにも思われる。さあ、残された時間で何をやろうと考えている今である。

小学校卒業まで

私は1950年3月に東京で生まれた。戦後5年目である。当時、日本は貧しく、ようやくかりんとうが出てきたときだったという。私の父は、高等商船学校を出た（と言っても戦時の短期養成）航海士で、18歳で、軍属ではあるが、船に乗って日本と南方との間の兵員の輸送に従事していたらしい。終戦間際だから、撃沈される船も多く、父は何度も船の修理のために岡山県玉野市の三井造船所にドック入りし、そこで働いていた母と出会って、結婚した。戦争の経験は強烈で、かろうじて生き残った父には、戦後の生活は人生のおまけとしか思えなかったようだ。記憶力の良かった父は、53歳で引退してから、日単位の出来事を「私の個人史」として詳細に綴っているが、その大半は戦争と戦後数年であり、私が生まれたころから社会も自身も急に生活が良くなったらしく、記述は大幅に減っている。

母は貧しい家に生まれて、大変苦勞したようだ。香川県に生まれて、そこから一家夜逃げで玉野市へ行き、小学校もまともに行けなかったようだ。しかし、年齢まで含めて自分の過去を明かさなかった節があり、母から聞いた

話がどれだけ真実を含んでいるのかは分からない。私には姉が一人いて、母と一緒に良くかわいがってくれた。長男だと思っていたが、実は3つ上に生まれた長男が4か月足らずで病死したのでお前は次男なのだと、中学生になってから何度も言われた。父の「個人史」を読むと、戦後まもなく、父と母と基之叔父の3人で、小さな砂利運搬船で瀬戸内海を往復していて、長男はそこそこ生まれたいらしい。泰弘と父の弘の字を受け継ぎ、眉目秀丽で愛らしく皆にはキリストの生まれ変わりに見えたようだ。そのあと生まれた姉も私も亡くなった長男の顔立ちにははるかに及ばず、両親はがっかりしたらしい。でも、おまえにも義弘と命名するのに、届けに行くで戸籍係から、いまは弘という漢字が使えないといわれ、急ぎよ、男の子だから野郎の郎に変えて届けたとのこと。母が「義弘ちゃん」と呼びかけてあやしているところに父が帰宅して、「義郎になった」と告げたという。義はキリスト教からきているらしい。義人という叔父がいるが、キリスト教徒の意味らしい。

1950年3月8日に東京都中野区で生まれた。左は母。



私の修業時代

父方の祖父は信州から東京に出て、苦勞して逋信省の役人になり、戦後できた国際電電で課長になったそうだ。私が飯倉分館にできた郵政研究所に向した時、母はとても喜んで、あの入り口を左に行った部屋でおじいちゃんは執務していたのよ、という。小学校しか出ていない祖父は官僚では係長どまりで出世できず、東大をめざすよう子供たちの教育に力を入れていたようだ（「個人史」では、力の入れすぎが父の学業失敗のもとだと書いている）。クリスチャンで子供たちはクリスチャンネームをもっていた。父には祖父の存在が大きく、私は「おまえは筒井の3代目だから」とよく言われた。祖父は人の良い人だったらしく、2度も友人の連帯保証人になって大きな借金を背負い、その借金の返済で私の両親は苦勞したようで、「家族以外の連帯保証人になるな」が家訓だった。父方の祖母は信州の庄屋の娘で、裕福に育ち、美人で学校も出ていて、祖父はどんな希望も叶えると約束して結婚してもらったらしい。無学の母を嫁として認めず、母はずいぶんいじめられたそうだ。

私が生まれた翌年、父は2000人からの応募を勝ち抜いて、スウェーデン商社のガデリウス商会に就職し、生活は豊か⁽²⁾で安定した。祖父は戦前、都心から離れた中央林間に小田急が分譲した広い敷地を買っていた。たぶん私が3歳ごろに、両親は（祖父の借金返済のために）南側の一部を購入して、そこに家を建てて戻っている。数年後、ブロックの新築を増築した。庭に掘った大きな穴をタンクとした水洗便所があり、スウェーデン製のドラム式の洗濯機や冷蔵庫があるというモダンな生活だった。そこから姉とともにキリスト教の幼稚園に行き、林間小学校に通う。小学校では下田季子（トシコ）先生にかわいがられた。家にも来られ、その後もずっと親交があった。母は私を溺愛しており、私の宿題を代わりにやってしまうほど私を甘やかした。大人になってから、それに感謝しつつも、それで私は軟弱になったのだと思った。

(2) 私は裕福に育ったという印象であるが、実は、わが家はかなりぎりぎり綱渡りの生活だったようでもある。子供には親の家計は分からない。

近所の家で書道を習い、貸本屋でマンガを借りて読み、ラジオの相撲中継に熱狂という生活である。ベビーブームのため校舎が足りず、60人学級で、2年生の時は建て替えのため2部授業であった。

1957年に祖父が亡くなり、父も中央林間からの遠距離通勤がたたったせい、肺結核を患ったため、都心に家を求め転居することになった。3年生の時に渋谷区立笹塚小学校に転校する。林間小学校は授業進度が遅く、笹塚小学校の進度に追いつくために、引っ越しの日に母指導の下に、九九を一生懸命覚えたことを思い出す。教育熱心だったが、ほめてやる気を起こさそうというやり方が良かった。私は図鑑を見るのが好きで、それを書き写して夏休みの自由研究としていた。母によると、引っ越し前の私は神経質でひ弱だったが、引っ越し後はやんちゃに遊ぶ子になったそうだ。毎日、学校が終わると、暗くなるまで近所で鬼ごっこをして遊んでいた。父がPTAで学校に行くと、校庭で転げまわっている子がいて、あれあれ、あれじゃお母さんの洗濯が大変ねえと笑われているのを見たらお前だった、と叱られた。毎日、力の限り遊びまわっていて、パンパンの風船のように充実した毎日だった。

5年生、6年生と担任だった伊藤先生が、ありんこ学級という名で学級新聞を出し、綴り方教育みたいな感じで、生徒を結束させ、グループ学習で引っ張った。先生からは強い影響を受け、私の社会への関心はこの時芽生えたのだと思う。社会科では戦争に至る歴史を扱い、自分が東北の田舎で機銃掃射にあったときの恐怖を話してくれたりした。成人してから父にこの話をすると、おまえなあ、伊藤先生はいくつだと思ってるんだ、そんな体験をするはずじゃないか、と言う。伊藤先生は革新派（つまり左翼）だったに違いないと信じて尊敬していたが、父は、日教組の闘士だったのは転校した3年生の時の、よく生徒を殴る先生で、伊藤先生は日教組ではない、と意外な話。子供の私は、簡単にだまされていたのかもしれない。ちなみに、当時は、革新は正義、保守は反動と思っていた。

私の修業時代

小学生の時はわんぱく坊主



父は、夜遅く帰ってきて朝早く出かけるので、ほとんど会うことがない。母は父を理想的に描こうとしていた節がある。林間にいたときは、朝起きると、お父さんはさっき出かけたところと言って、姉と一緒に、遠くを走っていく小田急の電車に、「グッドバイ、グッドバイ、グッドバイバイ、とうさんお出かけ手を振って、電車に乗ったらグッドバイバイ」と歌い、行ってらっしゃいと手を振るのが日課だった。笹塚では、5年生になると、子供たちはお小遣いを月ぎめでもらい、それで本を買うのが楽しみだった。古本屋で読売新聞社から出ている何冊組かの年鑑を買って、父にまだこれは無理だからと返品されたのがとても悔しかった。家では家族会議を開くようになり、月の目標などを決めて報告・点検していた。子供が自立した意識をもつための工夫の一つであろう。一方、両親は実はそれほど仲良しでなかったのだが、子供の教育のために仲良し夫婦を演じていた節がある。

中学校

近くの笹塚中学校に進んで、2年生になる頃から急に大人に向けての成長（いわゆる反抗期）が始まった。読書は以前から好きだったが、大人向けの小説や哲学書を読むようになった。哲学書はプラトンを好きな哲人先生がいたからだ。区で実験のコンクールみたいなのがあって、そのために休日なのに学校に行かなければならないという日の朝、テレビで初めての衛星中継を見ていたら、ケネディ大統領の暗殺が報じられてショックだった。ケネディはなぜか日本の革新派にも人気があった。結婚してからこの話をしたら、妻も（大阪で）全く同じ経験をしたという。実験コンクールは全国的な催しだったのかもしれない。生徒会に参加したり、卒業式の送辞を読んだりということもしたようだ。

3年生の時に、父が堺の機械工作企業に転職し、皆で堺に引っ越した。それまでセールスマンだったのが、経営側に回るのがうれしかったようだ。姉

2年生の卒業式で、送辞を読んでいる風景



私の修業時代

は都立高校に合格していたが、府立三国ヶ丘高校を受けて、そこに行くことになった。堺市立浜寺中学校への転校は、私には大きな意味を持った。東京都ではかなり校則の規制が緩和されていたが、大阪府では遅れていたからだ。生徒はどんな規制も当たり前として受け入れるものだが、前の学校で正しいことが、こっちの学校で間違いとなると、その規制の正当性に疑問の目が向けられる。新学期開始早々、朝礼で生徒会の女の子が「学校の帰りに喫茶店には寄らないようにしましょう」と言ったのに、「なんで悪いんだ」と大声で怒鳴って、問題に。担任の高尾秋子（トキコ）先生が、あの子は問題児ではなくて、と擁護してくれて大事にはならなかった。高尾先生は私をかわいがってくれて、卒業時には、君は石川啄木のような性格で……と言われて、私はそれをずっととてつもない過大評価だと思っていたのだが、だいぶん後になって、啄木はあちこちで人と対立して問題を起こしていることを知り、先生はこっちの方を言いたかったのかと納得する。浜寺中学校はベビーブーマーの入学のために1学年16クラスというマンモス校であった。大多数のサラリーマンの比較的豊かな家の子弟と少数の漁業従事者の子弟が混在していた。不良グループは相撲部に所属しており、気に入らない子を校舎の影に呼び出しては殴ったりしていたようだ。どういうわけか、私は彼らと仲良くなり、彼らが相撲の型を取ると、押しても引いても動かない安定性を持つことを知り、感心した。

3年生の時の重要な事件は、『賃金・価格・利潤』と『賃労働と資本』を古本屋で見つけて読み、マルクス経済学にはまったことである。秋ごろには、僕は高校に行かない、働く、と言い出したが、母は何にも反応しない。急に反抗的になってきた私に手を焼いていたのかもしれないが、ともかく、反対もせず何も言ってくれない。「働く」と言ったが、そんな気がして口に出しただけで、何も成算があるわけではない。数か月たって、自然と立ち消えになった。

中3の春、本屋で偶然見つけた、『賃金・価格・利潤』。
一遍にマルクス主義のとりことなる。



大阪学芸大学附属高校天王寺校舎

友人が1月に試験がある大阪学芸大学附属高校天王寺校舎（附高）を受けに行くというので、私も公立高校受験の練習に行ってみることにした。予想外に合格通知が来た。附高は、従来、附中からの内部進学者で足りない分だけ（つまり欠員が生じた数人だけ）採っていたが、このころ、附中3クラスのまま、3クラスから4クラスに増員し、1クラス（45人）分多くとり始めたので、以前より格段にやさしかったのだと思う。父は喜んで、行けという。戦前の感覚では師範の附属は良いところであり、男子の制服が旧海軍の制服にそっくりだったのが、うれしかったようだ。母も、この制服に惚れて結婚したのよ、と言う。

附高は、自由・自律の生徒を育てることを目標としていた。入学後すぐの校外合宿ではパブリック・スクールを模範とする、池田潔の『自由と規律』（岩波新書）を読んだ。驚いたのは、試験の時に先生が教官室に戻ってしま

私の修業時代

い、試験監督がいないこと。もちろん、他人の答案を見てそれを写すなどという所業は、当時の私には考えられなかったし、皆もそうだったようだ。解き終わるまで、一生懸命解き、もし解き終わってまだ時間があったら寝る。そのあと、他人の答案を見る機会があっても、自分の答との違いを楽しんでいるだけだ。夏休み前には、学年主任の山口格郎先生（英語）が皆を集めて、皆さん、なぜ夏休みがあるか知っていますか。暑くて勉強に向いていないからです。ですから、夏休みに勉強しようとは思わないように、という訓辞を垂れる。友人も、ここに入って受験には不利になるけど、楽しもう、というスタンスだった。

入学早々、恋に落ちる。同じクラスで、毎朝通う電車が同じだった。ほどなく打ち明けるが、附中の時から好きな人がいるという。彼女も片思い。でも、図書室で勉強したり、映画を見に行ったり、彼女の家を招いてくれたり、という思い出を残してくれた。親友もできる。当時、中学校では大阪府の統一試験があり、それで1番だったという俊才だ。附中では、田舎の生徒に1番を取られて、と奮起を促され、その彼が今度、附高に入学してくると言われていて、内部組は注目していたそうな。彼とは、哲学の道を歩いたり、私の母方の祖母の岡山に遊びに行ったりと、思い出が深い。そして、そのほかにも、数多い友人ができた。放課後に源氏物語を一緒に読む会ができた。この古語の輪読会は、卒業後に復活したそうで、現在でも例会があるそうだ。英語の山口先生は詩が大好きで授業でも朗読してくれたが、卒業後も先生が亡くなるまで、一緒に集まったり、古座川にある先生の別荘で遊んだりしたそうだ。漢文の片山智行先生は、同人誌を出している小説家志望で、授業は最初に頁をアサインして教室室に帰り、終了前に戻ってきて説明するという省力ぶりだった。しかし、漢文を中国語で読んでくれるので、人気抜群で、中国語を学ぶクラブ(?)まで発足した。われわれの素敵な先輩と結婚されていて、私たちの仲間もしていただいた。個人的に困った友人を助けてくれ

るなど、信頼できる方だった。その後、大阪市大の教授になられ、魯迅研究で新聞に登場するほど有名になられた。黒板の端から端までずうーっと線を引いて行って、南アメリカのパンプスの授業を始めた地理の山崎俊郎先生、生徒の自主性を重んじる国語の久島惟行先生など、ユニークで魅力的な先生がたくさんいた。私も、高校の教員になろうと心を決める。

学校生活の重要な部分を占めるのが、クラブ活動だ。新聞局に入り、2年生の時は局長。新歓で妻を新聞局に get し、お母さんも一緒に阿倍野の喫茶店に行ったことを覚えている。社研部もやっていた。2年生の時に自治会の会長にもなった。城君が副会長、妻が会計だった。これが最も重要なクラブ活動だが、附高はもっと自由だった。地歴部の白山登山に行ったり、サッカー部に半年だけ入ったり、天文部の夏休みの観測に入れてもらったり、いろいろなクラブのつまみ食いすることが許されていた。卒業記念写真には、行ったことのない文芸部の写真に、ちゃっかり私が写っている。体育の先生が足りなかったのか、学芸大の先生からラグビーを2か月ほど教わった。皆、それにはまってしまい、クラス対抗をやるうということになって、1か月ほど、放課後、毎日練習をして結構うまくなった。体育祭の棒倒しはオス全開の競技で燃えに燃えた。危険だということで2年生から騎馬戦に変更になって、皆がっかりだった。私は、友達と語らって、2年生の文化祭で演劇に挑戦した。新劇の台本から選んで、その利用を申請し、私が演出して上演したのも楽しい思い出である。

マルクス主義への傾倒は続いていて、民主青年同盟（民青；日本共産党の青年組織）に加わったが、仲間がないので、学芸大のお姉さんたち付きということになり、結局、何の活動もなく形だけに終わった。図書室に政治・社会に関する面白い本がたくさんあることに気づき、片っ端から借り出して読んだが、そのうち、借り出したどの本の図書カードにも、一人だけ名前が記してあるのに気が付いた。名前は祖泉。貸出年月日から少し前に卒業した

私の修業時代

学年だということも分かった。まったく「耳をすませば」みたいな話だが、相手は男性。私は同じ関心を持っている人に思いをはせ、心の中で語りかけていた。

実は、わが家には大事件が高1の時に起きていた。父が社長との経営方針の違いで解雇されたのである。違法解雇だ、裁判まですると息巻いていたが、結局諦める。私は、附高入学の実績を活かして、近くの医者の子（小学生）の家庭教師になって金を稼ぐことに。数か月後に、父はモンソン商会という、スウェーデンではガデリウス商会とならぶ商社だが、日本法人ははるかに小さい会社に就職し、東京に引っ越した。当時、公立高校は転校生を基本的に受け入れないという不合理なシステムがまかり通っていて、転校は私と姉にとってかなり不利であった。一方で、最近と違って、父の世代の男には、妻が付いてこない単身赴任などは思いつくこともなかった。私たち二人は卒業まで大阪で下宿することになった。喜び勇んで、私たち姉弟は、姉が通っていた三国ヶ丘高校の近く（堺東近辺）に1年半ほど下宿した。

そうこうするうち、高2の12月年末も差し迫った頃、赤旗は、うたごえ運動で若者に人気のあったぬやまひろしを攻撃、除名する記事で埋め尽くされる。1月以降も、中国共産党から長らく干渉を受けてきたとの記事を掲載し、結局、日本共産党は先のソ連共産党からの独立に加えて、中国共産党とも手を切って、「自主独立路線」を歩むことになる。その内容の正誤はともあれ、昨日までほめたたえていたぬやま氏や中国共産党を手のひらを返すように罵倒し、しかも、以前からひどいことをされ続けていたと主張するのは、私には理解不能で、そんな一貫性のない人や団体は信頼するに足りないと思うほかなかった。民青からの脱退を申し出た。早々と共産党についていくことはやめたが、その後、長い間にわたって、マルクス主義と共産党は私にとって親和的な存在だった。

それと並行して、高2の終わりの春休みに、『中央公論』の特集号で近代

経済学が紹介され、玉野井芳郎の『マルクス経済学と近代経済学』日本経済新聞社（1966）を読んで、初めて近代経済学なるものの存在を知る。今に至るまでそうなのだが、私は「思いて学ばざれば、すなわち、危うし」をいつも地でいっている。すっかり信じていた労働価値説まで間違いと主張する、しかもまともな学説があるというなら、いったい自分は何を信じて生きていけばいいのか。自分の将来を今の自分が決めるのが怖くなり、モラトリウムを決め込んで、（自然科学における経済学版だと思っていた）物理学をまず学ぶことを考える。それを卒業した後、経済学に学士入学しようと思い、父に6年間学資を出してもらおうことをお願いしたら、もともと（金にならない？役に立たない？）文系でなく理系に行ってほしかった父は、「本当は工学部に行ってほしいのだが、まあ理学部でもいいだろう」と言ってくれた。

玉野井芳郎『マルクス経済学と近代経済学』を読み、
マルクス主義信仰に疑問が。



そんなわけで、理系に進路変更したが、文系・理系のコースはすでに2年になるときに決まっていて、3年ではもう変更できない、と認められなかつ

私の修業時代

た。仕方がないから、数Ⅲや理科のもう1教科については自分で勉強することにした。しかし、受験勉強は全くうまくいかず、成績は落ちるばかり。4回の実力テストの間、170人ほどの学年で、20位ぐらいから120位ぐらいまで順位を落とした。3年生になるとき、姉は早稲田の法学部に入って東京の両親のところに戻ったので、一人になる私のために、母が高校の近くに下宿を見つけてくれた。最初に行ったのが、階段の下にある3畳ほどの見たこともないようなみじめな部屋で、ここに住むと思うとしょんぼりした。そのあと、もう一つの部屋を見、3番目の部屋が寺田町駅の近くだった。6畳ほどの部屋で、ひかり荘という下宿屋の一室だった。古い下宿屋だったがきれいに思えてほっとした。母は、ここにしましょ、ねっ、と言う。初めからここに決めていて、みじめなところから見せたのだと気付く。人生の知恵で母にはいづもかなわない。受験競争から脱落したとき、一人暮らしはそれに拍車をかけた。近くには私のように親から離れて下宿しているのがあと二人いて、近くに住んでいる奴の家に押し掛け、朝までトランプに興じた。明け方になって、下宿に帰る。誰も通っていないほんやり明るくなった寺田町駅横を歩きながら、こんなのはいけない、と思う。帰って数時間寝て、高校へ。たいていは2時間目から行った。

恋人ができた。初めて自分を好きになってくれる人が現れたのである。彼女は頻繁に放課後、下宿に通ってくれるようになった。秋には二人で親を会わせようと画策して、遠足をさぼり、母親を奈良公園で会わせた。結婚後、妻のお母さんは、あの時この子はあんと結婚するのだと覚悟したのよ、と語ってくれた。11月には最終の受験校相談があり、教室を訪れた。彼女は入り口で待っていてくれた。担任の久島惟行先生は入り口を見まわした後、東大はやめたのですか、とおっしゃる。10番ぐらいでないとう受からないのに、とても受かるはずがないことは先生もご存知なはずなのに。受験は、早稲田大学の理工（応用物理）・政経、東京教育大の物理、東京外大というキメラ

だ。この子はいったい何をしたいのか、意味不明の受験だと思われたのに違いないのに、先生は何もおっしゃらずに、good luck と言ってくれた。附高では、同学年、あるいは1年違いの夫婦がたくさんできた。先生がたにも、生徒と結婚した人が多い。

高校では、自治会、新聞部。
そこで、片岩ひろ子嬢に出会った。



1月になると実質的に授業はなく、教室には何人かの生徒が来て雑談するだけになったので、私は東京の実家に引き上げて、受験に備えた。早稲田の政経では数学を選択したが、60分の試験で全く解けなかった。歴史の問題も難問・奇問というやつで、答えられえないことが分かっていたから、手も足も出なかった。理工・政経とも不合格の通知が来て、父はすっかり悲観した。早稲田に落ちて文理科大（東京教育大の旧称）に受かるはずがないというのが戦前の常識だったようだ。私は偏差値では早稲田はダメでも教育大は受かるはずだと思っていたので、まだ本命が残っていると思っていた。教育大は

私の修業時代

学科ごとに募集していたので、入学後、他の学科に回されるリスクがなく、当時、ノーベル賞をもらった朝永振一郎先生がいらっしゃったことも魅力的だった。そして私には、『太平洋戦争』（岩波書店）を著わし、教科書検定訴訟で戦っていた家永三郎先生が文学部におられることも魅力だった。試験当日はマンガを持って試験場に臨んだ。受験番号1～50の50人の部屋で、理由もなく、このうちの30人近くが合格するのだと思った（受験室はたくさんあったのだけ）。帰宅した時、経験がないほど疲労困憊しているのに驚いた。

東京教育大学理学部物理学科

無事合格し、家永先生の授業（教養の単位）も始まった。先生は何かを見ながら、ゆっくりとしゃべって、一句ごと書き留めさせる。私はそれは非効率だと思って、先に資料を印刷して用意することを申し出たが、先生は、「それは必要ありません」。今思うに、音読や書き写しこそ重要な教育というお考えだったのだと気付く。

これは後の年になるが、NHK ドイツ語講座で有名な学習院の早川東三先生が非常勤で来られていて、さっそく簡単なドイツ語の小説を読む。妻も一緒に受講した。Ach, Mädchen! を「やあ、ねえちゃん!」と訳されて、皆、笑いと拍手喝さい。楽しい授業だった。ドイツ語は、ドイツ音楽が好きになるので、歌詞で覚え、夜間の大阪市大経済学部に入ってから、木本幸造先生の「やさしいマルクスから始めて、マックス・ウェーバーを読む（シラバス）」授業に、やはり妻と一緒に参加した。受講生はほとんど私たちだけのような少数だったが、1文が1ページにもわたるウェーバーの難解な文の仕組みを丁寧に解き明かしていただいて、その知的作業の魅力に引き付けられた。なぜ、こんな難解な文章を書くのか、そのころは分からなかったが、後日（研究を始めてから）、日常の言語は多義的で、概念を正確に伝えるのには不十分であることに気づく。先生は毎日十数時間、文献を読むという知の巨人で

あった。授業の最後には、訳された小冊子『バリケード市街戦批判・平和革命・選挙・妥協論』（清文堂出版、1970）をいただく。

1年生の専門の授業は、1時間（実は50分。通常の授業は2時間単位）の力学だけだった。それにはもっと長時間の力学演習がついていて、二人の助手の先生が担当していた。最初に、来週の問題を渡された。学生が、その頃出ている初等テキスト（原島鮮『力学』裳華房）を示して、どこまで勉強すれば解けるんですか、と尋ねると、この辺だね、と90頁あたりを指す。さあ大変だ、ということになった。この科目の試験は、1時から始まり、なんと、持ち込み自由、時間無制限というすごさだった。私は方方にはあきらめたが、野口君、岩本君といった友人数人は、先生が差し入れてくれた夕食を食べながら、夜8時ごろまで頑張っていた。表（オモテ）先生は兄貴のような存在で、数年後、私たちが企画した50km夜間歩行にも参加した。私も妻も参加した。教育大（茗荷谷にあった）を出て、西側の山手線内を南方面でぐるっと回って有楽町を経て教育大に戻る、というコースだった。高校の時にも50km夜間歩行があり（その後100kmに拡大されたと聞いた）、全員京都の東寺まで歩いた経験があるので、たかをくくっていたが、朝の5時ごろ有楽町で降参した。皆が教育大に着いたのは朝の11時ごろでぼろぼろだったという。今、思うに、企画者がちゃんと距離を測っていたかが怪しい。

湯川、朝永に加えて、日本の物理学者には著名な人がたくさんいた。その中で、武谷三男は社会運動に積極的で、当時の反政府的な雰囲気から、われわれ物理学生に人気があった。有名なのは、湯川の中間子論を「実体論的段階」と位置付ける科学論だ。ニュートン力学を例にとると、ティコ・ブラーエの観測事実収集が現象論的段階、ニュートンの運動法則が最終段階であるのに対し、ケプラーの3法則を実体論的段階とする。経済学研究において、現象論的段階・実体論的段階が多層に連なっていると思われ、武谷の本からは大きな示唆を受けた。また、原発に反対する主張にも強く影響された。そ

私の修業時代

の武谷が立教大学で教えているというので、友人と講義を聞きに（見に？）行ったりもした。

妻が早稲田の政経に入学した後は、教育大から早稲田まで歩いて、有名な先生の講義を見に行った。それは、講堂のような巨大教室で、落語をやる、漫談調の、といったものであったのだけど。妻は、経済学の授業がまったく面白くなく、大学に行かないで、家で小説を読んでばかりで4年間を過ごした。唯一面白かったのは、4年生の時の柏崎利之輔氏のハロッドの本の輪読だったようだ。

物理は難しかった。毎日、必死で勉強して、練習問題も散々解いていくのだが、試験問題を見ると、やはり解けない。1回目の試験で合格するのはひどいときは3名ほど（30名定員だったが応用物理学科が新設されて60名に増えていた）、2回目の試験で10名ほど、3回目の試験に落ちれば単位がなかったのだと思う（私は2回目組）。1、2年生の力学、熱学、流体力学、解析力学ぐらいまでは何とか理解できたが、電磁気学になるとさっぱり分からなかった。電気だけなら何となく分かるが、電磁気というのは、結局、何もイメージできない。2年生の時の物理数学も分からなかったし、関数論を自分でしっかり勉強しなければ、物理学の理解は困難だったようだ。ここを乗り越えた連中は数学科に勉強に行っていたようだが、私はその見通しももっていなかった。3年生になると、統計力学、量子力学と学部の物理の中心科目の授業が待ち受けている。先生方の話では、ここから授業を始めることにすれば、現在の（素粒子論の）物理学まで学部で教えられるのではないか、ニュートン力学を教えて何になるのかという主張と、確かにそうだが、量子力学を理解するためには、力学から解析力学まで教えておくのが教育的に良い、という主張があって、後者に従っているとのことであった。解析力学とは、ニュートン力学を作用（＝エネルギーの時間積分）の最小化問題として記述するので、その後、量子力学などの新しい理論が、実はその表現で書けることが

分かるからである。人間が思いつく法則が本当に正しければ、その法則は新しい事実も予測するはずであるが、相対性とか対称性とかいう抽象的な概念が、その時代に発見される法則を超えて成立することは、自然の中にある真実を示唆しているようで興味深い。ともかく、3年生の授業が重要であって、それ以前はその準備にすぎないというので、力が入った。3年生になる前の春休みには、ボーム『量子論』と朝永『量子力学Ⅰ』を読んだが、量子力学の発端までは分かるのだが、肝心のたどり着いた理論がよく分からない。授業が始まったが、やはりよく分からない。先生は、授業だけ聞いて理解しようとするのは無理ですから、自分で勉強して、授業は今ここまで来たことを確認するのに役立ててください、とおっしゃる。4年間必死に勉強して得たものは、自分は馬鹿なのだ、というあきらめと挫折だった。⁽³⁾そして数年たって、勉強しても勉強しても理解できないような教育はすべきでないと開き直った。何よりもまず、教育は学生のレベルに合わせて設定されるべきだと。

学問以外にも、大きな挫折を味わった。それは、1970年安保闘争である。東大・日大全共闘と東大安田講堂事件が有名であるが、東京教育大も東大同様、1969年の入試が中止になったほど大きく揺れた大学であった。しかし、東京教育大は他の大学と少し事情が違っていた。それは何年か前から、筑波への移転問題があり、理学部を中心とする学部・大学本部はそれに賛成・移転推進だったが、文学部が反対してもめていたのである。学生の多くは、筑波移転は文部省が従順な大学を作る陰謀だと考え、少なくとも文学部教授会の自治を守るべきだと考えていた（当時は「学部自治」の考えが強かった）。文学部の学生自治会は革マル、理学部は民青が握っていたが、夏休み前に自治会の投票で、ついに全学ストライキに突入した。（先生でなく）学生がス

(3) 高校時代の友人の一人は、物理学に進むのを避けて医学に進路変更した。それは、お兄さんが大学で物理を選び、あまりに必死に勉強しているのを見て、自分はいたくないという理由だった。お兄さんは阪大の助教授になる。

私の修業時代

トライキというのも今から考えると変だが、抗議のハンガーストライキのようなものか。われわれは3人ほど交代で、理学部本館の入り口に机を置いて、先生がやってくると（ほとんど来られないのだが）、お入りになれません、お帰りください、と言って帰っていただくのである。もっとも研究室で生き物を飼っている先生もおられるとかで、そういう先生はお通しすることになっていた。たしか、文学部はもう少し前からストライキで、入り口は机などを積み上げて封鎖していた。民青と革マルは（中核も）犬猿の仲であるから、学内で小競り合いが起きないとも限らなかった。一度、何のためだったか、文学部の建物に入ったことがあるが、中は防弾化していた。一方、理学部本館は基本的に学生が立てこもったのではないと思う。物理の学生にはノンポリおよび民青(自治会)支持が多かったが、革マルなど新左翼系の友人もわずかながらいた。10.21のベトナム反戦デーには、新左翼系から参加の呼びかけがあり、新宿騒乱事件がテレビで報道されると、行かなければ、という気持ちで湧いていた。しかし、間違っ警察に逮捕されることが怖くて行けなかった。結局、自分は臆病であり、公権力と対峙することなどまったくできない人間であることが見えてきた。なぜかは知らないが、理学部自治会・民青も冬に近くなって急に過激になり、ヘルメットをかぶり、じぐざぐデモをし、新左翼学生と衝突することもいとわなくなってきていた。こうした中、自分は一生、政治とかかわることはやめて、自分と自分の家族の保身だけを考えて生きていこう、と心に決めた。それまで、自分の無限の可能性を信じ、社会に貢献することを理想としていたことからすると、これは大きな挫折だった。

秋には、たぶんノンポリ学生がお願いしたのだろうが、われわれのために、朝永先生が、研究室のある光学研究所で輪読してくださるというので、何回か研究所に通った。しかし、この時の気持ちが晴れることはなかった。1月になって、大学は機動隊を導入して学生を排除し、今度は大学が機動隊をもつ

てキャンパスを1年間封鎖することになった。

父は、この事態を見ていて、1年間、スウェーデンで働いてくるよう勧めた。父が自分で取引しているリモコン商会というのが、ファールンというストックホルムから200キロほど北の町にあって、その工場で、バルブを閉める器械の組み立てをやることになった。横浜港－(船)－ナホトカー(鉄道)－ハバロフスクー(飛行機)－モスクワ－(鉄道)－ヘルシンキー(鉄道)－オーボー(船)－ストックホルム－(鉄道)－ファールンという大旅行だった。滞在中、宿泊先の3人家族との生活、15人ほどの職場での体験、近所の子供たちとの朝まで飲酒＝目標のない怠惰な生活、夏休みのヨーロッパ大旅行、帰路に寄ったカルカッタなど思い出は尽きない。帰国してからひと月、あくせく暮らすのにどんな意味があるのかとブラブラ過ごす、そのうち、また、ネズミのようにせかせかせした生活に戻る。職場で気のいい兄ちゃんだったサーレンは、15年ほど前、どこでアドレスを見つけたか突然メールをよこして、家族の写真を送ってきた。受験に失敗して1年間浪人していた妻とやり取りした手紙の束は宝物である。『資本論』第1巻を一緒に読んでいたやり取りもある。

結局、6年かけて卒業した大学生活は何だったのか。私は2つの挫折を経験して、若者からかなり大人になった。そして、何人もの得難い友人を得たが、皆、大学紛争の痛手で傷ついていた。その後、野口語君は高校の教師になって、相模原高校で教えた。岡村千恵さんは皆に祝福されつつ先輩と結婚して吉田千恵になり、高校の教員になったが、妊娠中に重病になり、子供を出産するために昏睡状態で延命して、出産直後に亡くなったというドラマになりそうな事件もあった。吉原透君は早稲田大学の院で博士号をとり、民間会社の研究部に勤務し始めた5月に自殺した。ご両親はあきらめきれずに『透』という追悼文を自家出版した(『海軍主計大尉 小泉信吉』で知るように、親の愛は深い)。

二人の高校生の家庭教師をしたことも忘れ難い。教育大は戦前、東京高等

私の修業時代

師範学校・文理科大として旧制中学の教員を独占していて、戦後、それが好ましくないという教育の民主化によって普通の大学になったのだが、戦前の「栄光」が忘れられない茗溪会（同窓会）の意向によって「教育大学」を名乗ったのである。⁽⁴⁾ その名前のおかげで、家庭教師の需要は多く、謝金も高かった。二人は友達同士で、新しいほうを「新弟子」と呼んでいた。英語の勉強に、数学の方が勉強しやすいんですとか言って、経済数学の教科書（Chiang）の最初の簡単な代数のところを読んだりして楽しかった。二人とも志望大学に入れた。新弟子は後ほどイェールに在外研究に行っているときに訪ねてきた。

この時期の最大の事件は、結婚したことである。妻は1浪している間に、血迷って、経済に志望を変更してしまった。私と逆に文転というわけだ。そしてお父さんと取組み合いのけんかをして、東京に出てくる。石神井にあった私の自宅の近くに下宿を借りて早稲田に通う。私は、下宿先に通い始め、ついには居ついてしまう。そのうち、南長崎の一軒家で安い部屋を貸しているのを見つけ、引っ越した。大家さんは、関肇さん95歳で、原敬の甥だという。年中、炬燵に座って、新聞を読んでいた。「ハムカツを買ってきてください」と頼まれたり、メモを渡されて「カセットとはなんですか」と尋ねられたりして、私たちは親しくさせていただいた。数年後の寒い冬の朝、廊下で硬直して亡くなっているのを発見する。この古家は雨漏りしたが、傘を逆さにして天井から吊り下げるとそこに雨がたまって、その下で寝られることを思いついた。しかし、ある晩はあまりに大雨だったため、傘がひっくり返って、二人ともずぶぬれになってしまった。食費は1日600円に決め、35円の肉まんを食べることと、100円の古本を買うことが楽しみだった。

レコードを図書館から借りてきたり、FM放送をオープンリールテープに

(4) もう一つの広島高師・文理科大は広島大学に名称変更した。東京女高師はお茶の水女子大、奈良女高師は奈良女子大と改称した。

コピーしたり、オペラの歌詞を妻がタイプで書き写したりした。本当に幸せな日々だった。この大学時代には、両方の両親と婚約の会食をし、友人や親せきを招いて結婚式を挙げた。仲人は高校時代の恩師、片山先生。奥さんはわれわれの先輩にあたる。いたずら心で、会の開始にモーツアルトのレクイエムをかけたが、気が付いたのは片山先生だけだったようだ。

結婚のメリットの一つは、下痢に弱いとかの自分の軟弱な性格や習慣を、妻のアドバイスに従って叩き直すことであった。まあ、根本的な改善は除くべくもないが。もうひとつは、他人が自分と違うことに気づいたことである。夜、炬燵で明日の試験に備えていた妻が、仕方がないか、やりたくないけど奥の手を使うかと言って、ノートをじっと見つめている。何をしているのか尋ねたら、丸暗記しているという。数分見つめていれば画像を記憶できるという。確かにノートの汚れまで覚えている。これには驚いた。実家に行ったときに、その話を両親にすると、じっと聞いていた父が、お前は違うのかい？という。聞くと、父はもっとすごくて、昔のことを動画で覚えているという。その後、ミトロプーロス指揮のレコードのジャケットに、楽団員の話が書いてあって、ミトロプーロスが練習の最中に目をつぶると、見ろよ、マエストロが頭の中で楽譜をめくっているぜ、とささやいたものだった、という記述を見つける。後年、この話を思い出して、大阪大学のアンケートで、画像記憶する人がどれくらいいるのかを尋ねた。いろいろな記憶法のうち、「各ページ毎に、まるごとの画像として暗記しようとした」というのを第1位に選んだ人は、2622人中112人で4.3%だった。また、

A 37a52f1

B 𠂇*⊕⊗∩

という列を比較して、Bの方が覚えやすいと答えた人は、2731人中163人で6.0%だった。どうやら画像記憶をする人は、日本人では5%ぐらいいるらしい。私には、これは全く思いがけない事実だったが、逆に、画像記憶する

私の修業時代

片岩ひろ子さんとは20歳で同居を始める。
23歳の時結婚式を挙げる。



人は、皆そうやって記憶していると思うのであろう。

いよいよ、卒業時に、これからどうするかを相談した。経済学を志しながら物理学を学んでしまった私と、逆に分子生物学を志しながら間違っ経済学部に入ってしまった妻と、この人生の掛け違いを直すことにする。

高校教員になる

かくして、私は就職先として、国家公務員行政職を受験するがあえなく敗退。東京都公務員試験は合格したが、交通局勤務であり、「毎日のバスの車掌さんたちの手配・配置をしてもらうが、若い大学出を嫌って意地悪する人もいて大変ですよ」と脅かす。ずいぶん不安になったが、とにかく食べていくためには覚悟しなければ、と思い直す。第1志望は公立高校の教員だが、当時は教員志望者が多くて競争は激烈だった。関西の数県と東京都・神奈川県、それと、滑り止めに埼玉県の中学校を受験する。受験会場で大学院修了の人たちもいることを知り、不安になる。東京都と大阪府は不合格で、合格

したのは、岡山県、奈良県、和歌山県、神奈川県の高校と埼玉県の中学校だった。奈良県と和歌山県からは、その後なんの通知もないので問い合わせると、結局、今年はだれも採用しないとのこと。岡山県からは採用の通知があって、矢掛高校美星分校勤務だというので、妻と見学に行く。山奥で、星がきれいなところだった。分校長は京都大学農学部の博士で、分校の先生は町民に尊敬されていて、野菜などは買う必要がないほどだ。生徒はみな素直で、ここでの生活は理想とすべきものだと力説された。

12月には、妻の受験先を決めなければいけない。われわれも少しは現実的になっていて、研究者になれなくても食べていける医学部にしようということになった。当時も国公立大学は1校しか受験できないので、ずいぶん迷った。結局、美星町からは岡山大学に通うことも不可能で、神奈川県なら横浜市大が一番だが、大阪出身の妻は大阪に戻りたかったのかもしれない。大阪市大か阪大。合格しても1年留年して、その間、私が大阪府の教員に挑戦する。今年大阪府を落れているのだから、かなりリスクな選択だが、そうだった。大事をとって、大阪市立大学を受験、合格した。あのとき、大阪大学を受験したら、また、人生が変わっていたはずだ。「受験」とかが人生の岐路になる。

結局、神奈川県に就職。神奈川県では物理・化学の教員は3名採用とのことだった。赴任先は神奈川県立山北高校。小田急線新松田で御殿場線に乗り換えて1駅。富士山が大きく臨める、大きな川沿いの、のんびりした雰囲気のある学校だった。妻は1年間、秦野にあった大きなスーパー「アブアブ赤札堂」でアルバイトをする。たまには早稲田にも行っていたようだ。「料理の食材をパックにして売り出したらと提案したけど、売れるはずがないと言われた」などと話していたが、結構楽しい体験だったようだ。4月になって登校すると、事務室で、あなたは独身ですね、と念押しされる。われわれは、二人が国からお墨付きをいただいて結婚という制度に押し込められる必要はないと

私の修業時代

「人生の岐路」のころ



考えていたから、婚姻届けを出す気はなかった。はい、というと、結婚していれば……の手当てが出るという。結構な額だ。あわてて市役所に婚姻届を出しに行った。

御殿場線の本数が少ないので、先生も生徒も一緒に同じ電車で学校に来て、同じ電車で帰った。残業がなかったのだ。毎日10kmの距離を走って往復している体育の先生もいた。私と同時採用の先生は飛び切りの美人で、聞いたことがない「新体操」の選手だった。高校では物理と化学を教えた。授業のことはあまり印象にないが、生徒は素直で明るく、授業は楽しかった。夏休みが終わって2学期が始まった時、早く授業をしたくて待ってました、と言って、先生方から、そうか、私たちもそうだったなあ、初心を思いださなくっちゃ、と驚かれる。校内で盗難が起きて、職員会議で現状を嘆く声や、盗難再発を防ぐ対策を協議する中で、学年主任の先生が、学校というのは開かれた公共の場で、だれでも立ち入ることができるのだから盗難が起きるのは当たり前であって、それを特別なことだと思っていれば教育はできない、と発

言われて、思い込みや感情で全員同じ方向を向いて考えてはいけないのだと学ぶ。同時赴任の社会科の先生は変わった人で、待遇に不満を言っていたが、毎週土曜日に有休をとって、お休みにしていた。いろいろな人がいるんだ、というのが社会人1年目の感想である。

高校教師の1年目（1974年）の夏休み、来年の大阪転職を目指して活動を始める。大阪府立高校教員試験の受験と大阪市立大学経済学部（Ⅱ部）の学士入学試験受験である。受験勉強として、ミクロ経済学の教科書（『価格理論Ⅰ・Ⅱ』）を読んで経済理論の簡明さに共感を覚えた。⁽⁵⁾ その一方、マクロ経済学の教科書（建元正弘・小泉進『所得分析』）の入り口である国民所得会計は退屈でぴったりこなかった。

大阪市立大学経済学部（Ⅱ部）

1975年の4月から4年間、私は大阪府で高校の理科の教員を続ける一方で、大阪市大経済の夜学に通う（学費は1月600円）。妻は大阪市大の医学部に入学（学費は1月1000円）。翌年、第1子（長男）を出産、その翌年、第2子（次男）を出産。よくやれたものだと感心する。

大阪府教委で、新採用の教員の辞令交付式があった。「あなたたちの大半は教育困難校に配置されますが、それはあなたたちの評価が低いからではありません。困難校での教育には一層高い能力、あなたたちの資質が必要なのです。」当時、高校での授業崩壊が深刻な問題になっていた。今から思うと、困難校を志望する教員は少ないだろうから、新規採用者を割り当てるしかなかったのであろう。それでも、北野とか、清水谷とかいう人がいて、人事はどうやって決めるのだろうと思った。

(5) これは、経済学がやさしいという意味ではない。少なくとも、ゲーム理論や動的計画法、そしてミクロ計量経済学が標準となっただけからは、大学院レベルの経済学は非常に難しい。しかし、学部では初歩的な経済学の教育に限定されている。

私の修業時代

長男誕生。26歳，1976年。おい，父ちゃん，手元が危ないぞ。



私は工業高校に赴任した。設立当初は注目され，高い偏差値を誇っていたが，だんだん普通高校の下に位置付けられるようになったそうだ。最初の時間の授業が始まって，気づくと，生徒の一人が，紙を食べては口で器用にまとめて，ふっと噴き出すとびたつと天井にはりつく，しばらくすると乾いて落ちてくる。これを飽きずに繰り返している。2台の机を並べた座席で横になって寝ているのがいる。そのうち，立ち上がって歩き回るのが出てきた。漫画を持っているのでとりあげようとする，他の生徒にパスする。それを取りに行くと他の生徒にパス……という騒ぎの中，1時間目が終わった。

高校では，教員が結束して授業崩壊に立ち向かうよう，生徒指導部を中心に努力していた。「近所の人たちが怖がる生徒が怖がる先生」というのが何人もいて，私ら弱小教師の授業がうるさいと廊下からならみつけて，「ちゃんとせい」と，生徒にプレッシャーをかけてくれたりする。全く整然とした授業もたくさんあって，学校全体の崩壊を防いでいた。私の授業も，慣れてくるにつれ，さほど問題はなかった。それでも生徒に背を向けて板書してい

子育て風景



るときは何が飛んでくるか分からないと気になったものだ。だんだん、好意を示す生徒も出てきたが、授業が成功しているとはとても言えなかった。本当に問題なやんちゃな子は40人中5人ほどしかいないのだが、それでも、それに強く対抗して、授業を受けたいという子がいなければ、集団は崩壊してしまうのだということを学んだ。

工業高校なので、工業科と普通科から成っていたが、工業科の実習には真剣に取り組んでいるようだった。そこで、2年目には、授業の大半を物理・化学実験にし、説明（座学）の時間を可能な限り抑えた。1年生も担当したので、私が弱っちいのだということが知られる前に、2か月ほどは脅して強制的に授業を成立させ、その間に授業の面白さを印象付けようと画策した。

1時間目に、少し遅れて戻ってきた子を叱って皆の前で叩いた。これでしばらくは、一応皆こちらを見ていた。今なら体罰で問題になるが、1年間、授

私の修業時代

業崩壊するよりはるかにましだと思った。こんなに生徒の反応を読もうと授業に力を入れたことはなかった。だんだん授業は正常になり、大半の子が実験に参加してくれた。放課後、理科室に質問に来る生徒まで出てきて、割り算で分からなくなっているのだと分かり、筆算を教えたなら喜んだり、理化部に入って放課後に理科室で遊んでいく子が出てきたり。夏休みには動物の解剖をしようということになり、部員が家で飼っているウサギを妻の指導で解剖したが、臭くて食べられなかったり。振り返ると、指導要領からの逸脱とか、動物愛護の観点からも足りない点があったが、一応の成功だった。しかし、授業がまともになれるようになると、自分は何を教えているのだろうかという無力感が強くなってきた。

高校教師を辞めて研究生活を選び、十数年後に大阪大学に教員として戻ってきてキャンパスを歩いていると、筒井先生、と呼び止める人がいる。誰だろうと思ったら、高校時代に教わりました、という。確かに見覚えがある。どうしたの、と訊くと、数年前から大阪大学で技師として働いているという。先生こそどうしてここに、というので、私の話をする。教育の成果というのは、本当に長期を見ないと分からないものなのだと痛感した。それを信じることにする。

大阪市立大学に話を移そう。講義を受けた先生では、磯村隆文、宮本良成、惣宇利紀男、星野中という方々が挙げられる。磯村先生は、私が学部で受けた授業で、唯一「良」をつけた先生である。といっても、当時は試験が近づくくと学生がストライキをして大学を封鎖してしまうという状況で、レポートになることが多かった。自分はまともなレポートを書いたつもりなのに、良は意外だった。当時、大阪市とサンフランシスコ市は姉妹都市の協定を結んでおり（一昨年（2018年）、慰安婦問題をめぐってこの協定が破棄された）、大阪市大からサンフランシスコ州立大学に学生を派遣しようということになった。各学部1名だったが、幸運にも、夜間部の代表として選ばれ、約1か月

の留学で、半分はホームステイという素晴らしい体験をした。市長に会い、サンフランシスコ・ジャイアンツの試合を見学し、友人たちにはヨセミテ公園に連れて行ってもらったり、新聞に大きく紹介されるなど、素晴らしい体験だった。その時の引率が磯村先生で、皆、すっかり知り合いになった。かなり後だが、先生は大阪市の助役となり、市長に就任した。

夜学はともかく眠かった。まず、大学の食堂で夕食を食べてから、9時ごろまで2コマだが、たいいてい1コマは寝てしまった。残念ながら習ったことがあまり身に着いた風はない。学生のほとんどは普通の学生で、社会人は極めて少なかった。本来の目的と違い、偏差値が低い学部というだけになってしまったようだ。だんだん、いろいろな大学で夜学が廃止されるのもやむを得ないか。それでも、たとえば、阪大院の先輩である山田雅俊さん（大阪大学名誉教授、山形大学を経て、名古屋市大・阪大で私の同僚）は家庭の事情で、学部は神戸大の夜学だったそう。社会に果たした役割はやはりある。

星野中先生はマル経の理論の先生。大阪市大は京大と並んで関西ではマル経の2大拠点だったようだ。後日、私が名古屋市大にいたとき、大阪近辺の私立大学で私の移籍を考えてくれた人がいたが、「君は学部は大阪市大だったのか。うちは京大が多いからそれではムリだな。」「いや僕はマル経ではなく近経です。」「いやそういう問題じゃない、学閥は結局つるむから。」とかいうやり取りがあって、その話は無しになった。星野先生は美男子で、さっそうとしていて、かっこが良かった。先生の講義に惹かれて論文を読むと、資本論で「集中」と「集積」という言葉が最初の方の巻と後の巻では使われる頻度が違う、このことから……という研究だった。私は、これは訓詁学ではないかと思い、一層マルクス経済学から離れる一因になった。その後、高校時代の親友、城君の家を訪ねた際、彼のドイツ文学の研究が、著作の中で、いろいろな単語が使われる頻度を調べるという手法だと聞いて驚いた。最近知ったところでは、20世紀になっていろいろな人文・社会の学問が科学であ

私の修業時代

高校教諭の傍ら、大阪市立大学の夜間部へ。
答志島での院合宿。1978年7月。



りたい、それには客観的な証拠に基づいて主張することだと考えて導入したのが、言語学的なこの手法だったようだ。

大学では、柴山幸治先生に院のゼミに出席を許可される。ゼミは、毎週土曜日の1時から5時、6時ごろまで、そのあと、杉本町駅近くで会食だった。ゼミの授業には当時、成長理論をやっていた森誠さん（現大阪市立大学教授）、公共選択（アローの不可能性定理）をやっていた大谷和さん（奈良県立大学名誉教授）などが出席されていた。森さんは、確か、瀬岡先生の弟子だったのではないと思う。柴山先生からは、ご自身が大阪商大の副手だった時に先生だった福井孝治から近代経済学を学ぶよう指示され、独学で近経の計量経済学者になったと聞かされた。独学で完成された研究者になるのはイメージすらできない。大天才である。私の卒論は「最近の日本経済について」。簡単な推定をした部分があるが、学部生はコンピュータが使えないので、最小二乗法の逆行列を炬燵に入りながら何日か筆算で計算したのを覚えている。あれが製本されて市大図書館で保存されていると思うと、奇妙な感じだ。阪

大の学部では卒論はなかった。

大阪大学大学院経済学研究科

学士入学は、4年制大学を修了した者が別の学部の専門課程を学ぶ場だ。前半2年の教養課程はどの学部でも共通しているので、学士入学者は2年で卒業することができる。私は夜間だったので、3年が卒業に必要な年限で、すでにそれを終えていた。格別、卒業したかったわけではなく、いつまでもこのままでよいとも思ったが、大学の規定でそういうわけにもいかない。高校の教員生活は、ようやく学生たちがおとなしく授業を受けてくれるようになっていたが、そうになると、むしろ物足りなくなっていた。やはり、大学院で学びたいというのが結論であった。妻が医学部を卒業するまでの6年間は家計を支える約束だったが、待ちきれなくなり、私は、夜間高校で教えて、昼間は大学院に通うという計画を立てた。家から通える範囲にある大学院は大阪市大と大阪大学らしいので、この2校を受験することにした。

大阪大学の日程が先だった。試験科目は英語（午前）と経済学（午後）。30名ほどの受験生がいた。英語がさっぱりわからず、これは絶対にだめだ、帰ろうと思ったが、来年のために経済学の出題を見ておこうと思い直して、午後も受験した。ところが、思いがけず1次合格の知らせが来て、面接を受けることになった。

会議室に、先生方全員が⁽⁶⁾左右に分かれて着座されていた。「本学の志望動機は何ですか？」と予想通りの質問。高校の教員であり、通える大学がここと大阪市大しかないから受けました。受かったら、定時制高校に替わります、と今から考えると恐ろしいことを説明したら、「両方受かったらどちらに行きますか？」と訊かれて、あせった。「入学したら何をするつもりですか？」

(6) 今思うと、「理論政策系」の先生だけで、経営系と歴史系の先生はいないはず。

私の修業時代

とこれも予想通りの質問に、「景気循環論」と答えると、「景気循環論をやりたいのですか?」と言われ、もうそれは古いといった感じ。ある先生が「いや、最近では policy cycle (選挙前に景気が良くなる現象) とか言うね」と発言したとたん、面接官であるはずの先生方が、私を放っておいて大議論になる。動物園みたいだと思って、初めて、本当に行きたくなった。おしまいは(後から思うと)蠟山先生が、まあ何をやるかは入学してから決めるとして、とまとめてくれた。まったく予想外に合格通知が来た。入学者は私を含めて4名(理論政策系。ほかの系のことは全く知らない)。井澤裕司君(現立命館大学教授; ここから当時を回顧して、恐れ多いが、「君・さん」は当時の呼称を使う)は関西学院大から、森信宏君(現奈良教育大学教授)と中田喜文君(現同志社大学教授)は大阪大学出身だった。⁽⁷⁾

合格通知を受けて、私は定時制への配置転換を申請し、無事、異動した。今から思うと、高校・教育委員会側の対応はいつも大変好意的であった。それにもかかわらず、神奈川県の上北高校のときと同じく、定時制も結局1年で辞めてしまうのだから、振り返ってみると自分本位な振る舞いに驚く。どうも、私は、いつも明確に自分のことを第1に考え、素直にそれに従って生きてきたらしい。ミクロ経済学の教科書を読んで大いに共感できたのも、そのモデルが自分と同じだったからだと思う。

最近では「近代経済学」という呼称はあまり使われなくなり、経済学というとそれを指すことが多くなったが、当時の日本では(日本だけ特殊だったようだ)、「近代経済学」はマルクス経済学より劣勢で、社会でのオピニオンリーダーもマル経の先生が断然優勢だった。⁽⁸⁾そして、それが五分五分に変わ

(7) 井澤君は森本先生に勧められて阪大受験に、森君は、1年間のプロパー勤めを経て、大学院へ。中田君は修士を終えて、カリフォルニア大学バークレイ校に留学。その後、同志社のCOE拠点リーダー。

(8) たとえば、『世界経済図説』や『日本経済図説』(岩波新書)の著者であった有沢広巳、脇村義太郎、美濃部亮吉は大内兵衛の弟子であり、戦前は弾圧されたが、

りつつある時期であった。東大がそうであったように、経済原論がマル経と近経の2本立てである大学が多かった。

文科省の審議依頼を受けて、2013年に「大学教育の分野別の質保証のための教育課程編成上の参照基準」を学術会議が取りまとめた。私も、経済分野の「参照基準検討分科委員会」委員長の岩本康志さんに誘われて気軽に参加したが、それは簡単ではなかった。委員会内部での意見の相違はさほど大きくなかったが、素案が意見聴取のために公開されたとき、とりわけ、「経済学の定義」「経済学の固有の特性＝経済学の方法」「現状と発展の可能性」「経済学を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養」などの主要項目について、マル経の方々を中心にいろいろな分野の方から強い反対が出た。その主張は『経済学と経済教育の未来』（桜井書店、2015）として公刊されている。それぞれの分野は違った学問的基盤（discipline）を持っているから、これは当然の批判でもあり、私が経済学を学び始めたころであれば、現在の参照基準がまとめられることはなかったはずである。本の帯には、金子勝氏の「本書を推す。生物も社会も多様性を失うと減じる。経済学も例外でない。」という言葉が躍っている。「学修方法」について、「リアクション・ペーパー」なるものが紹介されたが、教え方も多様化しているのだという感想だった。私は、翌年本学に赴任して、それが定着していることを知った。時代の変化を痛感したが、日本における学問分野の変化はそれほど素早いものではない。⁽⁹⁾

話を昔に戻すと、大阪大学は、戦後に人文・社会科学系の学部が新設され、

戦後は政府のブレーンとして活躍し、有村、脇村は文化功労者になった。美濃部は天皇機関説の美濃部達吉の息子で東京都知事を務め（1967-79）、当時の革新勢力の旗手であった。

(9) 国情から比較は的外れではあるが、2004年以降、中国復旦大学と共同で経済実験をした際、中国では1990年代に数年で全員「近代経済学」に変わるように指示され、大変だったという話を聞いた。

私の修業時代

経済学部・社会経済研究所は高田保馬、安井琢磨、森嶋通夫、熊谷尚夫、二階堂副包といった理論経済学者、市村真一、建元正弘、新開陽一、畠中道雄といった実証経済学者を擁し、近代経済学者のみによる経済学拠点として、「近代経済学のメッカ」と呼ばれ、日本を代表する突出した存在であったという。その一方で、入学より10年ほど前の所内の巨頭対立のために出入りが多かったのだ、といううわさも耳にした。

私が入学した1979年から、大阪大学経済学研究科は全国に先駆けてミクロとマクロを必修コース化した。翌1980年には、社研から畠中道雄先生が移籍されて、エコノメも必修コースになった。当時は、経済学の制度化が日本にも及び始めている時期だったと思う。サミュエルソンが *Economics* (『経済学』) という教科書を書いて、「新古典派総合」や混合経済を提唱したのは戦後まもなくだったそうなの。妻が早稲田の政経学部に入学したころには、その訳本が岩波からすでに出ていた。物理学でもファインマン(朝永先生と共同のノーベル賞受賞者)の教科書がやはり岩波から出たのは私の学部入学後だったと思うが、当時はそもそも大学でのやさしい「教科書」がほとんどなかったもので、貴重だった。サミュエルソンの『経済学』を妻に見せてもらったが、(厚さはすごいのだが)ずいぶん薄っぺらい内容の本だという印象を受けたので、結局、一度もこの本を読むことはなかった。サミュエルソンは戦後まもなく *Foundations* ⁽¹⁰⁾ を出版していて、ミクロ経済学の内容を整合的にまとめていた。それは、効用の序数性と個人間比較不可能性を前提としつつ、効用最大化に基づいて、市場の一般均衡として社会全体の経済を記述するもので、それに基づく厚生経済学(基本定理)も確立していた。しかし、私見では、そのミクロ経済学ではパレート最適しか定義できず、分配問題を分析できない(するべきでない)という根本的欠陥があり、現実の経済にとっての

(10) Paul A. Samuelson, (1947) *Foundations of Economic Analysis*, Harvard UP. 日本語訳は『経済分析の基礎』佐藤隆三訳、勁草書房。

指針としては不十分である。「新古典派総合」や混合経済のアイディアは、純粹の市場経済は *Foundations* で分析する一方、現実の経済には、ほかのもろもろの部分の知恵（ケインズ経済学とか）を足して対処するというものではないかと想像している。『経済学』を読んでみないといけないが。これは2枚舌であり、⁽¹¹⁾ 学問としては完結していない。ともあれ、1970年代に経済学の制度化が進み、経済学はいろいろな学者の意見の集まりではなく、経済学者であればたい同意する内容が合意されたようである。その内容は一種の「経済学原理主義」と、それと矛盾するが、実社会への応用を意識した経済学との折衷版である。その後は、ほとんどの大学の経済学部ではこの内容を教えるようになっていき、現在ではどの大学でも標準となっている。私が大学院生であった1980年ごろには、まだ、この「制度化」がマスメディアでも批判的に取り上げられ、その是非が論じられた。

大阪大学で学んだこと

まず、入学して、指導教官を選ぶ必要があった。私が入学した当時の大阪大学では理論経済学の優位が顕著であった。安井琢磨、熊谷尚夫、二階堂副包、森嶋通夫、稲田献一、久我清という輝かしい伝統があった。その中でも数理経済学がもっとも尊敬されていた。私と同世代の永谷裕昭、後輩の神谷和也、浦井憲へとその伝統は引き継がれていく。入学当時、私は数理経済学（均衡の存在証明）はその存在すらも知らなかった。関心があるのはもっぱら、実在する経済のメカニズムだった。理論モデルを作ることが経済学だとも思われず、制度や規制を考えるのに役立つ実証をしたいのだと気づいたが、先輩や友人は「やる前から理論をあきらめる必要はないよ。やってみてだめ

(11) これに対し、私が大阪市大時代に関心があったのは、ケインズ経済学を発展させようというハロッドとか、ケインズ経済学のマクロ的基礎付けをしようとするクラウアー (Robert W. Clower) やレイヨンフブド (Axel Leijonhufvud) であった。

私の修業時代

だったら実証にすれば」と勧めしてくれる。しかし、自分の気持ちに素直に従って、実証で探すことにした。私の思い浮かべる経済学に近いことをされていたのは、金融の蠟山昌一先生と労働の猪木武徳先生だった。蠟山先生とは11歳違い、猪木先生とは7歳違いだと思う。結局、金融を選ぶが、姉が銀行に勤めているからという程度の理由であった。蠟山先生はまだ助教授で、就職のために、ということで建元正弘先生に指導教官をお願いした（誰のアイデアなのか、そういう制度だったのかは覚えていない）。

博士前期課程（修士課程のこと）の授業

必修科目となったミクロ経済学のテキストは、Hal R. Varian の *Micro-economic analysis* だった。出版されたての、双対性（duality）を中心に据えて話題になった教科書である。4人の1年生の輪読で、担当されたのは、その年に海外の大学から移ってこられた、公共経済学の柴田弘文先生。柴田先生は図を使って証明するという特技を持った、国際財政学会⁽¹²⁾の会長（2000-2003年）、名誉会長を務めるほどの大家である。柴田先生は、「なんでこんなのをやるんだろう？」と教科書に批判的で、井澤君や中田君が楽しそうに説明してくれた。

MITより帰国され、27歳で助教授になって新聞に載った永谷裕昭先生の授業で、ドブリューの『価値の理論』⁽¹³⁾を輪読した。しかも、全命題を証明するという徹底したもので、われわれが証明できないと、先生が証明してくれた。この本は、アダム・スミスのアイデアである「見えざる手」を証明した金字塔であり、経済学の積年の目標を達成したと評価されている。

1年生の4人で稲田献一先生（社研）にお願ひに行き、修士の2年間、

(12) International Institute of Public Finance.

(13) Gerard Debreu (1959) *Theory of Value: An axiomatic analysis of economic equilibrium*, Yale UP. 1983年ノーベル経済学賞受賞。

Foundations を先生の研究室で輪読した。稲田先生は *Econometrica* などに数多くの論文を掲載しておられていて、大阪大学でもとりわけ高名な方だった。授業では、われわれが報告し、分からないところを先生が説明・証明する形で進行した。先生は豪華な椅子に座り、両足を机の上に載せて、……気が付くと、いびきをかいておられる。報告していた中田君が、報告を続けるべきか、先生が目を覚ますのを待つべきか、と目配せしている。……別の日、ある証明で黒板いっぱい書かれていたが、……どうもうまくいかないらしく、……ということもあって、先生でもわからないことがあるのだ、と驚いた。また別の日、「実証研究はどんな結果でも出せるから……」とか「宇沢君は数学者だから……⁽¹⁴⁾」という面白い話を聞いた。先生の業績のほうがよほど数学的ではないかと思った。さらに後日、『季刊現代経済』に掲載された「生物経済学」という記事を読んで、その突飛な着想に、先生も年を取られたのかな、と思ったが、私がばかだったと最近思う。授業中に文部省から電話がかかってきて、相談しているらしいのだが、われわれが聞いていても良いのだろうか迷ったことも。先生はいつも、わっはっは、と豪快。この授業は、Varian の本以上に、私の基礎的な経済学の知識となった。シラーさんに2004年のCOE講演で来日してもらった際、君はInadaを知っているか、と訊かれ、教わった、と答えると、うなずいていた。なぜ、Inadaを知っているかと訊き返すと、だれでもInada conditionを教えないと経済学の授業が始まらないではないかと笑った。

このように、修士課程で、当時のミクロ経済学については十分な知識を得ることができた。もっとも、ゲーム理論についてはまだ提供されていなかった

(14) 宇沢先生と稲田先生はともに数学科出身で、ラグビー部で一緒だったと聞いたような記憶が。宇沢先生の息子さんはやはり、数学者で神谷君の友人。私が、イェール大学に在外研究に行っていたとき、隣の建物に他の学生とルームシェアしていた。どういう経緯か、車を借りることになり、道路に駐車していたところ、夜間に大木が折れて倒れて、車が下敷きになるという事件があった。

私の修業時代

た。何年か後に、大学院のマイクロコースで使われている教科書の半分ぐらいがゲーム理論であることを知り、ゲーム理論の必要性を痛感した。友人たちと2年ほど輪読会をして、フーデンバーグ=チロールの中級の教科書を読んだが、難しすぎた。そこで、皆でギボンズの『経済学のためのゲーム理論入門』を読み、何が分析されているのかを理解することができた。さらに、チロールの産業組織の中級教科書⁽¹⁷⁾を輪読した。ゲーム理論を経済学でどのように使ったら良いかが分かる、良い本だった。練習問題として、それで学んだ立地理論を戦前の生命保険の高保険料高配当 vs. 低保険料低配当（高高一低低）競争に応用して、住友生命の関口昌彦さん、茶野努さん（現武蔵大学教授）⁽¹⁸⁾と論文を書いた。

久我清先生

久我清先生は大阪大学の数理経済学の伝統を引き継いで、*Econometrica*, *Review of Economic studies*, *Journal of Economic Theory* などの数々の著名な雑誌に論文を掲載されていて、私が入学したころもっとも活躍している先生として尊敬され、そして学生からはその厳しさと恐れられていた。ある学生が恐れず先生に質問に行き、君は新聞記者か、学者は自分の頭で考えるもんだ、と言われたといううわさで、われわれはさらに緊張した。われわれ4人の1年生は、社研のセミナー室の授業で背筋を張りコチコチになって座っていた。

最初のトピック「貯蓄－投資論争」はもっとも感銘の深い授業であった。まずオリーンの論文（*Economic Journal*, 1937）を読むことから始まり、ラン

(15) Kreps, David M. (1990) *A Course in Microeconomic Theory*, Princeton UP.

(16) Fudenberg, Drew and Jean Tirole (1991) *Game Theory*, MIT Press.

(17) Tirole, Jean (1988) *The Theory of Industrial Organization*, MIT Press.

(18) Tsutsui, Yoshiro, Masahiko Sekiguchi, and Tsutomu Chano (2000) "The premium-dividend competition in the pre-war Japanese life insurance industry: A game theoretic interpretation," *Japanese Economic Review*, 51(4), 519-535.

ゲ (Lange; *Economica*, 1938), ヒックス『価値と資本』の14章と補論, 森嶋⁽¹⁹⁾『資本主義経済の変動理論』の第1章 静学的ケインズ理論, ローズの論文と
いったものを1か月半で読んだ。私は, ケインズの「一般理論」の6, 7章
の報告をアサインされた。家で準備をしている光景までなんとなく記憶にあ
るが。難しい英語で, 数式を使わずに言葉で説明するスタイルに手を焼いた
が, やっと準備ができた。報告を先生はまったく無言で聞いていて, 私は無
事, 報告を終えることができた! ……と思ったら, 「それだけですか」とおっ
しゃる。「appendix がありましたが, 時間がなかったので割愛させていただきました」というと, 「それが, 報告してほしいところだったんですね」。
やってもうた, やってもうた, もうだめだ, と思ったが, 頭真っ白で後はよ
く覚えていない。先生は私に代わって, いつものように静かに, 丁寧に説明
してくれた。先生からすると, もういくつも論文を読んでいるのだから, こ
の授業で何をやるのかは, 分かっているはずだと思われていたのだろう。し
かし, 少なくとも私は全く分かっていなかった。授業の最後に, 先生が「貯
蓄-投資論争」の「答」を手書きのコピーで配布して説明されてやっと主題
が分かった。話はいわゆる「3面等価」をどう理解するかであった。消費財,
資本財, 労働を分けて企業と家計の予算制約をきちんと書き, 各市場の均衡
を記述することによって, 各市場の均衡条件がどのように書けるかが明らか
になる。授業で読んだ論文でも間違えているように, このことを理解してい
ない研究者は多い。だが, ケインズやヒックスは分かっていた, という授業
であった。マクロの第1歩が実は難しいのだと意外に思った。

授業は, 続いて, 不平等の尺度に進み, 次ので双対問題へ, 最後に要素価
格均等定理が取り上げられた。要素価格均等定理 (国際間で労働が移動しな
くても財が売れることによって賃金などが等しくなるという定理) をめぐる

(19) Hue Rose (1969) "Real and monetary factors in the business cycle, *JMCB*, 138-152 の最初の数ページ。

私の修業時代

論文もよく分からなかった。1年生には難しかったのだろう。先生は *Review of Economic Studies* (Burmeister=Kuga) や *Econometrica* に、この定理の問題と指摘される非現実的な仮定を大幅に緩和する論文を書いていた。グローバル化が重要になっている今になって、もっと勉強しておけばよかったと後悔している。ジェットコースターに乗って、経済学の王国をぐるっと見て回った気分だった。

マクロ経済学

ミクロ経済学に比べると、マクロ経済学の授業は貧弱だった。必修コースの授業は何だったか覚えていない。中田君たちと、夏休みに、R. G. D. アレン『現代経済学—マクロ分析の理論』(1968)を勉強したが、古すぎる。私が大阪大学の助手になった頃、2～3年下の修士の学生たちは、「新しいマクロ経済学」が教えられていないことに不満を鳴らしていた。先生方はやりにくかっただろうと思う。

マクロ合理的期待は、ルーカス(1972)、サージェント(1974)などが金融政策の無効命題を導くなど、注目の的だった。トービンとルーカスの応酬は『季刊現代経済』にも紹介された。トービンがルーカスを『マネタリスト・マークⅡ』と位置付けたのに対し、ルーカスは、ケインズとマネタリスト両方が古い経済学と応じた。年配の経済学者が合理的期待に批判的だったのに対し、若い経済学者は好意的で、私が大学院に入ったころには、ほぼ勝敗がついていたのではないかと思う。しかし、宇沢先生が「絶対に日本への上陸阻止」を唱えていた影響もあり、日本ではそれほどの熱狂的歓迎はなかったようだ。このような状況で、私たちにマクロ合理的期待理論を教えてくれたのは畠中先生だった。

畠中道雄先生

M2 (1980年)になると、社研から畠中先生が移籍されて、エコノメも必修コース化された。私は、M1の授業に十分ついていけず、その一方で、授業はとても面白かったので、結局、1年勤めただけで、定時制高校を退職する。周囲の立場で考えることはせず、3歳と4歳の息子を抱え、妻は医師国家試験を迎える年で、ちゃんと暮らしていけるかだけが心配だった。後先考えず、その時やりたいことを選んでしまうのは、若者の特権というべきか。

畠中先生の授業では、タイトルの分厚い教科書を丁寧⁽²⁰⁾に読んだ。基本的に行列計算はせず、漸近理論まではいかなかった。私の計量経済学の知識は基本的にこの基礎的な水準にとどまっている。

たしか、その次の年に、合理的期待に関する論文を読んだ。ルーカス⁽²¹⁾ (1973)は単純すぎて、こんなものなの?という印象だった。一方、サージェント=ウォリス⁽²²⁾ (1975)には感心した。シラー⁽²³⁾ (1977)のサーベイは難しいうえに長くて閉口した。この時、シラーさんは合理的期待論者なのだと思っていたのだから、合理的期待についてほとんど理解できていなかったことは確かである。たぶんその年の後半に、ボックス=ジェンキンスの時系列分⁽²⁴⁾析を学んだ。1変数の分析なのは不満だったが、十分に難しく、先生の解説がなければ、時系列分析は分からなかっただろうと思う。その後、ベイジア

(20) Theil, Henri (1971) *Principles of Econometrics*, New York: Wiley.

(21) Lucas, Robert (1973) "Some International Evidence on Output-Inflation Trade-Offs," *American Economic Review*, 63, 326-34.

(22) Sargent Thomas J. and Neil Wallace (1975) "'Rational' Expectations, the Optimal Monetary Instrument, and the Optimal Money Supply Rule," *Journal of Political Economy*, 83(2), 241-254.

(23) Shiller, Robert (1977) "Rational Expectations and the Dynamic Structure of Macroeconomic Models: A Critical Review," *Journal of Monetary Economics*, 4, 1-44.

(24) Box, George and Jenkins, Gwilym (1976), *Time Series Analysis: Forecasting and Control*, rev. ed., Oakland, California: Holden-Day.

私の修業時代

ンの授業の年もあったが、私はすでに就職しており、腰掛けで参加した程度で、ほとんど分からなかった。結局、計量経済学の勉強も十分でなく、確率の概念すら良く分かっていない。

畠中先生には、私が阪大経済学部の助手の時、貨幣需要関数の論文を『季刊現代経済』⁽²⁵⁾に頼まれているからと、お手伝いを頼まれた。⁽²⁶⁾その論文は、先生が学術雑誌に投稿中の論文⁽²⁷⁾で提案した（信頼区間でなく）「信頼ベルト」を適用するものだった。「信頼ベルト」論文に対するレフェリーコメントは英語の表現に対するものばかりで、先生は苦笑され、これ、きっとゴルトフェルトだよとおっしゃる。⁽²⁸⁾「日本の貨幣需要関数の形状をどう考えているか」と尋ねられ、考えたことがないなあと当惑する。「専門家の判断は、統計的な検定結果よりもはるかに信用できるから」とおっしゃる。専門家といわれるほどのものではない、と恥じ入る。数年後に貨幣需要関数のサーベイ⁽²⁹⁾を書いた時、貨幣需要関数について利子弾力性が負だと信じられているのは、論文が掲載されやすいように結果をセクションするバイアスがあるからだ、というサーベイ論文を見つけた。ありそうなことだ。2016年のアメリカ統計学会の「p 値追放」声明を見て、やっと、偉い先生は分かっていたのだとわかる。

学生に対しても、とことん同等の研究者として接する先生だった。日銀貸出の論文⁽³⁰⁾で、グレンジャー因果の方法を用いたとき、同時的因果について理

(25) 当時、日本経済新聞社が出していた、一般向けの、しかし、かなり専門的な学術誌。

(26) 筒井義郎・畠中道雄（1982）「日米両国における貨幣需要関数の安定性について」『季刊現代経済』第50号，124-135。

(27) Hatanaka, Michio (1983) “Confidential judgement of the extrapolation from a dynamic money demand function,” *Journal of Economic Dynamics and Control*, 6, 55-78.

(28) Goldfeld は、貨幣紛失事件（The case of missing money, BPEA 1976）の著者で有名、本多佑三さんのメンター。

(29) 筒井義郎（1986）「貨幣需要関数：展望」『オイコノミカ』第23巻 第1号，1-34。

解できず、先生に質問した。先生は詳しい解説を作ってくれたが、それでは実は十分ではなかったようで、古藤保次君（帝塚山大学・物故）、小滝光博君（広島大学）らと外生性の研究へと進まれた。1991年に出版された『計量経済学』（創文社）の「はじめに」で、「良い学生に出会った」と感謝の意を記されているが、その中に私まで含めてくださっている。

情報の経済学を学ぶ

当時は、情報の経済学が最先端で、1970年に発表されたアカーロフのレモン市場を筆頭に、労働市場についてはスペンスのシグナリング理論が1973年に、そして、信用割り当ての理論として画期的な、スティグリッツ＝ワイスの逆選択の論文が発表されるのは1981年である。1984年には金融機関の経済合理性をモニタリングの委託として初めて説明したダグラス・ダイヤモンドの論文が現れ、銀行論（banking）がいよいよ経済学の一部になる。こんな中、社研の鬼木甫先生がクイーンズ大学から戻って来られ、情報の経済学を講義録（lecture note）を用いて講義してくださった。当時、情報理論の日本語の教科書はなかったので、大変ありがたかった。先生はたぶん出版されるおつもりだったのだと思うが、結局、されなかったようだ。酒井泰弘氏の『不確実性の経済学』（有斐閣）が1982年に出版され、先生は大変ほめておられた。その後の私もさんざんお世話になった本だ。

金融

当時の金融（銀行論や金融政策）はまだ経済学の一分野と言い難い分野だった。とりわけ日本ではそうだった。そんな中で、日本の金融の経済学化に尽力されたのが、館龍一郎先生だった。館先生は浜田宏一先生とともに、岩波

(30) 井澤裕司・筒井義郎（1983）「日銀貸出の決定メカニズム」『経済研究』第34巻第2号，139-147。

私の修業時代

の「現代経済学シリーズ」で『金融』を1972年に出版されているだけでなく、小宮隆太郎氏とともに執筆された『経済政策の理論』（勁草書房、1964）は当時の必読本だった。館先生の門下に、蠟山昌一先生と堀内昭義先生がいた。寺西重郎先生は一橋大学経済研究所で、おそらく、藤野正三郎の流れをくむのだと思うが、蠟山先生とは親友で、いつも畏友と書いていた。これらの方々の影響を受けて、私は金融を学んでいった。

蠟山昌一先生

私の公式の指導教官は建元先生であったけれど、それは就職のために、実質的には、蠟山先生に指導を受けていた（というつもりであった）。もちろん、建元先生の授業にも出席し、アトキンソン＝スティグリッツの公共経済学の教科書を輪読⁽³¹⁾した。ロールズ（Rawles）の最も貧しい人の厚生で測る（Max-min）社会厚生関数が出てきて、ふつう習っている授業とはずいぶん違う印象だった。別の年度では、医療経済学のリーディングス（論文集）を読んだ。先生は、医学部の5年生を対象に「医療経済学」の講義をされていた。時代のはるか先を行っていたわけだが、残念ながら、私にはネコに小判だった。森君は院では小泉ゼミだったが、学部生のとき建元ゼミだったので（井澤君も院で建元ゼミだったかもしれない）、皆で先生の家遊びに行った。先生は奥さまを亡くされて、新しく奥さまをもらったところで、幸せそうだった。

ちゃんとした記憶がないのだが、蠟山先生の授業に出席したのは、たぶんもう少し後だったのだと思う。授業は、論文を徹底して批判的に読むことだった。ゼミには、近隣の大学に勤めている若い先生が2、3人来られることがあった。だまされたと思ってともかく同じことを3年、いや10年やってみな

(31) Atkinson, Anthony B. and Joseph E. Stiglitz, (1980) *Lectures on Public Economics*, Princeton UP.

さい、それで決まるからと言われた。先生はアカデミズムに批判的だった。「学」学（学問についてただ学ぶことを目的にすること）を嫌った。大阪大学の講義科目名を金融論、財政学から「金融」「財政」などと改めたのも先生である。役に立ってなんぼで、他大学に先駆けて、公共政策大学院である、国際公共政策科（OSIPP）を作ったのも先生である。これは、「真実」に関心を持ち、「役に立つこと」に無関心な私とは合わない。先生は、ずっと私のことを気にかけてくれて、最後は阪大に呼んでくれるのだが、そうした私には不満足だったはずだ。池尾和人さんを高く評価してかわいがっていたが、私は、彼こそ蠟山先生の後継者だとずっと感じていた。蠟山先生は自身を「切った張ったのアカデミックやくざ」と評していたが、圧倒的な人間性の迫りに満ちた方だった。私にとっては、学問上の親、神様のような存在で、その呪縛から解かれるのには長い年月を要した。先生が亡くなった後も、よ

蠟山昌一先生。ヨーロッパ旅行のレストランでのカリカチュア。



私の修業時代

く夢に出てこられた。しかし、金融の中の特定の分野を教わったということはない。というより、当時は、金融と言えば銀行論であり、それはほとんど経済学の分野として確立されていなかった。むしろ大学院修了後の研究生生活での学恩が多い。いくらでも、様々な逸話があるが、それはまたの機会に。

堀内昭義先生と寺西重郎先生

堀内先生の「窓口指導の有効性」(『経済研究』1977)を読んだ時の衝撃が忘れられない。ものごとをこのように見て(規制が実は有効でないを見て)、それを証拠でもって主張することができるのだというのは、目からウロコであった。その後の私の研究はこの論文をまねることを目指した。1980年に出版され、金融以外の経済学研究者たちから「初めて金融(banking)が何をしているか分かった」と絶賛された『日本の金融政策』(東洋経済新報社)はトービンの金融部門の一般均衡分析の日本版である。さらに、それは稲田先生の授業で勉強した *Foundations* の一般均衡分析の金融部門版⁽³²⁾だ。日本の銀行論(banking)の初めての教科書であろう。その後も、『金融政策論』(東大出版会)や蠟山先生と共著で出されるはずだった金融の教科書は、私にとってパイブルであった。後者の最初と最後の章(「日本の金融の未来」)を蠟山先生が書く予定だったのに、忙しくて書けず、結局このテキストは未出版に終わったようだ。私はそれが惜しくて、蠟山先生に早く書いてくださ

(32) その、金融部門以外の経済からの影響を一つの変数にまとめて取り入れたバージョンは、トービンのノーベル・レクチャー(1981年)で発表された。さっそく、経済企画庁での中期計量経済モデルに金融部門をつけ加え、金融部門と金融部門以外の経済部門をそれぞれの結果を順次やり取りして動かすという統合モデルを我妻伸彦氏(現立命館大学教授)が作り始め、私も話を聞く機会があった。トービンは1958年の“Liquidity Preference as Behavior toward Risk, *Review of Economic Studies*, 25(2), 65-86”で、ケインズの流動性選好説のアイデアからファイナンスへの橋渡しをした偉い人だ(Sharpe=LintnerのCAPMはその後、1964-65年に発表される)。証券の理論(finance)も銀行部門の理論(banking)もトービンが作ったと言える。

いと頼んだら「忙しい。君、代わりに書いてよ」と言われて、もうこの件はお願いできないと観念した。

東洋経済から「プログレッシブシリーズ」が出されたとき、その編集者であった堀内先生から、『金融』の執筆を依頼される。自分は金融（banking）の一部分しか（しかも中心でない部分しか）知らないので迷ったが、先生は「君がどんな教科書を書くのかを見てみたい」とおっしゃる。結局、金融（banking）に関する経済学の理論をまとめた第一部と、日本の金融の歴史をまとめた第二部から構成されるものになった⁽³³⁾。前半は、大阪大学経済学部の講義録をもとにしている。第二部には自分の計量分析の研究成果を少し含んでいるものの、この二つの部分は基本的に独立している。本当は、日本の金融の歴史を経済理論で説明し、計量分析で証拠を示さなければ「金融の教科書とはいえない」と思っていたので、この本は自分の（もしくは、当時の日本の金融学者の）至らなさを表していると残念だった。また、銀行は情報理論で説明されているのに、自分はそれを書く力量がなかった。この点の反省を活かし、大学院レベルでの教科書として使えるものを目指した『金融分析の最先端』では、第1章の金融機関の情報理論を内田浩史君（現神戸大学教授）に書いてもらった⁽³⁴⁾。これは蠟山先生の還暦をお祝いして、先生の弟子を中心とする大阪大学大学院出身者でまとめたものである⁽³⁵⁾。「先生のまいた種が金融の全分野に広がり、青々と繁茂していることを示したかった」のである。

寺西先生は、蠟山ゼミで読んだ『日本の経済発展と金融』（岩波書店、1982）以来、尊敬・憧れの的でしかない。ゼミで、蠟山先生は、いつものよ

(33) 筒井義郎（2001）『金融』プログレッシブシリーズ，東洋経済新報社。

(34) 筒井義郎編著（2000）『金融分析の最先端』東洋経済新報社。

(35) ただし、先生と関係の深い首藤恵さん（早稲田大学名誉教授）と池尾和人さんを著者に含む。

私の修業時代

うに、この本のいろいろな章を批判されたが、私には、100年の歴史を把握し、それを実証できるのは驚きでしかない。堀内先生は、私にとってはより身近な目標であったが、寺西先生ははるかに鎮座まします憧れでしかなかった。最近、先生の『日本型資本主義—その精神の源』（中公新書、2018）を読んで、再び強い感銘を受けた。私は別の道を通して宗教と経済の関係にたどり着いており、これから「宗教と経済」研究の追っかけをしようとしている。

修士論文

大学院2年目は修士論文執筆が最大の達成目標なので、できるだけ授業はとらないようにした。皆そうしたと思う。トピックの選択に2、3か月思い悩んだが、結局、そのころ話題となっていた「貸出市場の不均衡分析」を取り上げることにした。不均衡は最近ではあまり話題にならないが、当時は大はやりだった。失業や不況をヒックスのようにIS-LMで表現するのはケインズの真意を汲んでおらず、市場の不均衡をもっと明確に分析すべきだという主張で、クラウアーやレイヨンフードがその旗手だった。もっとも、IS-LMは経済の総需要を分析しているだけで、総供給を導き出すときに労働市場の不均衡を取り入れれば、AD-AS分析で不均衡を考えていることになる。AD-AS分析はだれが考えたのか、新古典派総論と同じように民間伝承 (folklore) なのかもしれない。おそらくこの理論的関心の流れで「不均衡計量経済学」が提唱された⁽³⁶⁾。「不均衡計量経済学」のアイデアはごく単純で、簡

(36) Fair Ray C. and Dwight M. Jaffee, (1972) "Methods of Estimation for Markets in Disequilibrium," *Econometrica*, 40, 497-514. 金融においては、失業に対応するのは信用割り当てであり、当時、関心が集中していた。Jaffeeはその第一人者であった。*Credit Rationing and the Commercial Loan Market* (1971), John Wiley and Sons. Fairとは1986-88年にイェール大学に在外研究員で行ったとき、娘を預けた保育園で出会ったお父さん同士である。Fairの論文の研究をしたと話したかどうかは覚えていない。

単にいうと、金利上昇期は超過需要にあるだろうから供給関数の推定に使えるし、下降期は需要関数に推定に使えるだろうと考えて、観察値を需要関数の推定に使うものと供給関数の推定に使うものに分類するのである。

この方法を日本の貸出市場に適用して、浜田先生と岩田一政さん(1977)は不均衡状態が支配的であるという結果を報告した。これに対し、古川顕先生⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾と釜江廣志さん⁽³⁹⁾は、異なる対象金融機関や異なる期間で推定して、均衡仮説のほうが妥当である、あるいは、どちらも判定できない、と主張した。私は、まず、各研究のモデル、推定方法、結果の判定方法などの不備を指摘し、いろいろな期間分類で計測したうえで、どの期間分類が適切であるかを判定する3つの尺度を開発し⁽⁴⁰⁾、均衡仮説と不均衡仮説のどちらが正しいかを判定する方法として、分類された期間の推定値をチャウ(Chow)検定で検定することを提案した。これらの方法を用いて不均衡仮説が正しいという結論を得、その推定結果を使って、各期の貸出超過需要額、均衡貸出金利を推定した。この論文は、面白い工夫がたくさん考えられていて、私のお気に入りである。一方で、その工夫は荒削りで、さまざまな欠点を持っているのである。多くの人の批判に答えられるとは思われない。思うに、私の研究は、簡単な経済モデルで記述される状態が現実の現象と整合的であるかどうかを実証的に調べるものである。答えがYESでもNOでも、私は「現実」の理解を一步進めた気になって、満足した。修士論文を完成したとき、私は

(37) 浜田宏一・岩田一政・石山行忠(1977)「日本の貸出市場における不均衡について」『経済研究』28, 193-203. 浜田宏一・岩田一政(1980)『金融政策と銀行行動』東洋経済新報社.

(38) 当時神戸学院大学に在籍。川口愼二先生の招きで1980年に大阪大学教養部に赴任され、大変お世話になった。その後、関西学院大学、京都大学経済学部をへて甲南大学。

(39) 当時、小樽商科大学、のち、一橋大学。

(40) たとえば、合致比率とは、超過需要であると想定された期間は、概して推定された需要・供給関数によっても超過需要期と判定されるはずである、ということから導かれる尺度。

私の修業時代

「真実」を明らかにしたと思って満足で誇らしく、研究者としてやっていけるという自信を得た。蠟山先生は、現実を一つの見方で切ってみただけだよ、と諭したが、私は鼻高々だった。

さて、2年生の時点に戻ってみよう。6月には、建元ゼミで修士論文の計画発表があり、建元先生から、そのトピックでいいでしょう、とOKが出る。建元先生はイギリスに半年行かれるので、戻ってきたら指導しましょう、ということに。当時はメールもテレビ会議もなく、国際電話も論外ほど高いから、指導を受ける手立てはなかった。私は、7月、8月と懸命にキャンパスの大型計算機を回しつつ上記の工夫を思いつき、この2か月で満足する結果が出た。9月いっぱいかけて、論文をまとめた。

10月初めに、夏休みに外国に行かれていた蠟山先生と廊下でばったり会って、喜んで原稿を渡すと、その場でちらっと見て、きみ、これ読めないよ、

修士論文。当時は手書きで、この清書に1週間かかった。



と突き返された。1か月かけて書き直して、先生の研究室に行くと、その場で数ページに目を通して、赤ペンを入れてくださった。それを読んで、初めて、論文はどう書くものかを学んだ。1パラグラフに一つ以上のことを書くことと理解されないこと、パラグラフとパラグラフのつながりにも注意すべきことなど。先生は漢字が多いのも「黒く見える」とおっしゃって嫌われていたし、「わが国」というのも価値観が入っているといって嫌っていた。「日本」と言いましょう。しかし、掲載された論文を見ると、タイトルが「わが国」だし、かなり黒いし、「需給関数」という言葉まで残っている。「需給関数」という言葉があるのかね？と言われていたのに。

学部の事務から、建元先生が帰ってこられるので、1月10日（修士論文提出日）の午前中に会いましょう、という連絡をうけとる。はて、それから、ここを直さない、と言われたらどうしよう、と心配していると、当日、事務から、運転免許の更新に行かないと失効するので後日会いましょう、との連絡。これでたぶん大丈夫だと安心する。一方、蠟山先生は修士論文を浜田先生に送ってくださって、コメントをいただくことができた。浜田先生が大阪大学を訪れたとき、お会いすることもできた。このようにして、『季刊理論経済学』に投稿するバージョンが完成するまで、さらに3か月かかった。

⁽⁴¹⁾1982年4月に論文が掲載された。私は、推定結果の表に、t値が大きければ◎、それから順に○、△、×という記号で有意度を表したので、本間先生から、競馬新聞みたいだな、と笑われる。当時はp値や有意度を示す星印(*)を書く習慣がなかった。校内で古川先生とすれ違った時、論文読んだよ、でも君は文章が下手だねー、とのお言葉。6ヶ月も推敲してちゃんと書けるようになったと思っていたのに、これはショックだった。もっと後になって、よどみなく話をするのと似て、良い文章を書くには努力だけでは足らず

(41) 筒井義郎（1982）「わが国銀行貸出市場の不均衡分析」『季刊理論経済学』、33(1)、38-54。

私の修業時代

頭の良さが必要なのだ、と知った。サザエさんの長谷川町子が、のらくろの田河水泡の内弟子だった若いころの話を書いていて、「先生は何の準備もせずに、27マスの最初のコマに絵を書き、最後のコマにのらくろが転ぶ絵を描いてから順にコマを埋めていくんです」と紹介している。池尾さんは、雑誌の記事の執筆依頼を受け、5000字なら3つ書くのは無理だからこの2つにします、とか言っていて、その通り書けている。こういう人たちに、私は絶対勝てないと思う。

日本の貸出市場の不均衡分析は、伊藤隆敏・植田和男のゴールデンコンビがハーバード大学とMITの院生であったときに2本の論文を書いている。一つは3段階最小二乗法で推定して、1981年に*International Economic Review*に掲載された。この推定法は、当時、私には利用できなかった。もう一つは金利調整関数の推定をして、私の修士論文と同じ号に掲載された。植田さんは私が阪大の助手をしているときに助教授として赴任された。赴任前のセミナーは彼のうわさを聞きつけた人で満員盛況。合理的期待を用いた金融政策の研究だったため、批判的な雰囲気だった。無効性命題は対数をとっているのが原因ではないかとかの質問も出た。植田さんからは、大学院のゼミで1時間不均衡分析の話をしてくれと頼まれたが、とてもその任でないと思ってことわった。私の修士論文について、合致比率（注40参照）のアイデアはよさそうで、きちんと計量経済学的方法として定式化できるんじゃないか、との示唆をいただいた。残念ながら、私にはそれだけの計量経済学の技術がなく、どのようなことをすればよいのか具体的にイメージできなかったのもそのままになった。ものすごく頭の良い人で、私の話の途中でそれから何を言いたいのがわかるらしく、反応が返ってきて、それが的確だった。

浜田宏一先生

修士論文が浜田先生の研究の追っかけで、浜田先生が蠟山先生の兄貴分だっ

日本の金融に関するコンファレンスプログラム

時 1985年2月12日～2月14日

於 静岡県裾野市 富士教育研修所

- 2月12日 午後1時 開会
開会挨拶 館 龍一郎 金融調査研究会会長
午後2時～6時
議 長 蠟山 昌一
報 告 平山健二郎、今 喜典
- 2月13日 午前9時～12時
議 長 植田 和男
報 告 堀 要、深尾 光洋
午後2時～6時
議 長 堀内 昭義
報 告 鹿野 嘉昭、武田 真彦、幸村千佳良
- 2月14日 午前9時～12時
議 長 寺西 重郎
報 告 鴨池 治、金子 隆
午後1時 散会

参 加 者 (50音順)

池尾 和人・岡山 大学	館 龍一郎・青山学院 大学
岩佐 代市・関西 大学	筒井 義郎・名古屋 市立 大学
植田 和男・大蔵省財政金融研究所	寺西 重郎・一 橋 大 学
金子 隆・慶応義塾 大学	浜田 宏一・東 京 大 学
鴨池 治・東 北 大 学	日向野仲也・東 京 都 立 大 学
幸村千佳良・成 蹊 大 学	平山健二郎・京 都 産 業 大 学
今 喜典・小 樽 商 科 大 学	深尾 光洋・経 済 企 画 庁
鹿野 嘉昭・日本銀行金融研究所	堀内 昭義・東 京 大 学
清水 啓典・一 橋 大 学	堀 要・神 戸 商 科 大 学
武田 真彦・日本銀行金融研究所	蠟山 昌一・大 阪 大 学

(以上20名)

たため、修士論文執筆時から先生の指導を受けることができた。しかし、本格的にご指導をいただいたのは、1986-88年にイエール大学に行った時なので、そのことはまたの機会に記したい。この時期には、先生が藪下史郎さんと一緒に、トービンの『マクロ経済学の再検討』（1981）を翻訳した時に、深尾京二さん（当時東大の院生、イエール大学滞在中に一緒になる）とともに、私にも訳文のチェックを依頼されたことがある。一所懸命読んだが、くだけた先生の訳文とまじめな藪下さんの訳文がミスマッチなの以外、変なところはみつからなかった。ところが先生から多額のお礼をいただいて、恐縮

私の修業時代

した。蠟山先生が、「もらっとけばいいんじゃない。印税だから」とおっしゃるので、いただくことにした。

もう一つの思い出は、助手をしているときに、蠟山先生と浜田先生が共同で資金を調達して、富士山麓の研修所で、3日間、若手金融研究者の合宿（日本平金融研究会）をしたことである。館、浜田、蠟山、寺西、堀内、古川といった諸先生と、植田和男、鴨池治、池尾和人、金子隆、平山健二郎らの若手。浜田研にいた落合仁司さん（現同志社大学教授）と日向野幹也さん（現早稲田大学教授）も参加した。この会議はその後の日本の金融研究に大きく資するものになったと思う。

同窓生たち：阪大経済の第2の黄金時代

大阪大学経済学部・社会経済研究所は、その発足当時から日本の「近代経済学」のメッカと呼ばれ、研究者の拠点であった。私が学んだ当時は、第2の黄金時代を迎えていたのではないかと思う。建元正弘、畠中道雄、新開陽一といった教授が日本経済学会の会長を務めていることもその一つの証左である。助教授には蠟山昌一を筆頭に、中谷巖、林敏彦、猪木武徳、本間正明といった、学界ではもちろん、広く経済・社会で活躍したメンバーが存在する。そして彼らは、経営の宮本又郎を加えてとても結束が固かったそうである。この教官組織で鍛えられた当時の学生が現在の日本の経済学界を支えている。

私の先輩には、当時助手だった、入谷純さん（現大阪学院大学教授）がおられる。上級生には、2年上に跡田直澄さん、木村陽子さん、1年上に小佐野広さん（現京都大学教授）がおられた。みな、学部のコンピュータ室にたむろしていたものだ。数年下の後輩には、神谷和也（現神戸大学教授）、市村英彦（現アリゾナ大学・東京大学教授）、大竹文雄（現大阪大学教授）、大垣昌夫（現慶応大学教授）、岩本康志（現東京大学教授）、柴田章久（現京都

大学教授) 福重元嗣 (現大阪大学教授) といった, 現在の日本経済学界を支える綺羅星のような研究者が並んでいる。市村君は日本経済学会の現会長, 大竹君は現副会長 (次期会長), 大垣君・神谷君は会長候補の常連である。大阪大学に就職した人が少ないのは少し寂しいが, いろいろな大学で活躍している方が良いことであろう。阪大の伝統は, できる限り学外から人をとろうだった。

私が阪大に着任した後も, 優秀な学生が育っている。着任した1991年から2年間, 院で連続形の動学最適化のテキストを全ての練習問題を解きつつ輪読した。実は, 私は研究で動学最適化を使ったことがない。分散形はちゃんと知らないのだが, 連続形は, 物理学科では学部2年の解析力学に出てきた。物理で分散形の世界は考え難く, 多分そのため, 分散形の動的最適化の数学は戦後発見されたのだと思う。逆に, 人間が連続時間で将来を考えているのはイメージしにくい。その授業の参加学生は, 福田祐一 (現大阪大学教授), 新谷元嗣 (現東京大学教授), 堀敬一 (現関西学院大学教授), 瀧井克也 (現大阪大学教授), 赤井伸郎 (現大阪大学教授), ジャンボ吉田といったそうそうたるメンバーであった。

就職まで

最後に, 修士論文を終え, 博士後期課程に進んでから名古屋市立大学に就職するまでを要約しよう。博士課程の1年生を終えて大阪大学助手になり, その1年後には名古屋市立大学に就職したので, 2年間の出来事である。まず, 同級生の井澤君と統計的因果関係の方法を用いて, 日銀はコール・レートをとらみつつ, 日銀貸出を意図した水準に決定していたことを明らかにした。⁽⁴³⁾ これは畠中先生の授業で習ったグレンジャー因果検定の練習問題であっ

(42) Kamien, Morton I. and Nancy L. Schwartz, *Dynamic Optimization: The Calculus of Variations and Optimal Control in Economics and Management*, Dover Books.

私の修業時代

た。それまでの日銀貸し出しの決定は、堀内先生、古川先生などの研究があり、われわれはそれらの批判から始めたので、本間正明先生に「君の論文には、知り合いばかり出てくるな」と笑われる。

もう一つは、新規貸出金利の推定である。当時の日銀は貸出残高の平均金利しか公表していなかったが、貸出市場で約定されるのは新規に貸出された額の金利だと考えたからである。⁽⁴⁴⁾ 修士論文の不均衡分析を発表した時、「新規貸出金利は残高の金利より変動が大きくその調整力は大きいはずなので、それをういれば均衡仮説が成り立つのではないか」という批判をいただいた。なるほどと思い、公表されていなかった新規貸出金利データの推定に向かったのである。新規貸出金利の推定の難しさは、それぞれの期間には新規貸出とともに返済される貸出があるので、貸出残高からだけではこの両方を推定することが不可能な点に由来する。しかし、 n 期間前に約定された約定期間 n の貸出が当期に返済されるのであるから、期限別貸出残高データが推定の手掛かりになる。利率別貸出残高のデータも使える。これらを使って、平均残高金利と新規貸出金利の定義的な関係式から、いくつかの仮定を置いて、新規貸出金利をシミュレーションすることを思いついた。これは単に技術的な演習問題であり経済学とは何の関係もないが、その推定を工夫することは結構楽しかった。推定された新規貸出額は平均貸出残高の $1/3$ ほどで、新規貸出金利は残高の金利とそれほど変わらなかった。私はルンルン気分で蠟山先生に、どこに投稿したらよいでしょう、と尋ねたが、蠟山先生は、『大阪大学経済学』（学部の紀要）はどうだい、とおっしゃる。少し落胆したが、そうか、こんな研究は価値がないのだ、と納得した（これは当時の院生が、

(43) 井澤裕司、筒井義郎（1983）「日銀貸出の決定メカニズム」『経済研究』第34巻2号、139-147。

(44) 池尾さんは、顧客関係が強く、継続的取引が多いはずで、残高の金利とどちらが良いかは分かりませんね、と言っておられた。

レフェリーに審査されない紀要はレベルが劣ると考えていたからである。皆、自分の論文を載せてはいたのだが)。しかし、社会の反応は違った。日本銀行におられた（そして、窓口指導論争で素敵なモデルを書かれた）江口英一先生は、日本銀行は新規貸出金利のデータを持っていること、私の推定値はかなりそのデータに似ていること、私の論文がきっかけとなって、日銀はそのデータの公開を決め、現在データ・クリーニングをしていることを教えてくれた。また、経済企画庁は経済白書に新規貸出金利を使った分析を掲載する予定であり、私の推定法に若干の変更を加えて新規貸出金利を推定したことを伝えてきた。私自身は、名古屋市立大学に就職したのちに、新規貸出金利を使った不均衡分析をやり直す。しかし、その推定は期待したような明確な結果をもたらさず、自分の推定法が十分でなかったことを悟る。（あるいは池尾さんの指摘のように、残高の金利の方が重要なかもしれない。）本来なら、公表された新規貸出金データを使って分析すべきであろうが、新規貸出額がなく、断念する。

第3の研究は、ジャフィーとラッセルの均衡信用割り当て論文⁽⁴⁵⁾に対するコメント論文⁽⁴⁶⁾である。当時、信用割り当ては花形分野で、不均衡ばかりでなく均衡信用割り当ても注目されていた。これは、結局、スティグリッツ＝ワイスが逆選択モデルで成功するのだが、その前にいろいろと怪しいのがあった。ゼミで読んで、この論文には2つの解釈が可能だが、どちらの解釈でも問題があると感じてコメントを書いた。外国雑誌 (*Quarterly Journal of Economics*; *QJE*) に投稿しなければならないので、初めて英語で書いた。蠟山先生はなぜか、英語の添削を嫌がり「丁度、神戸商大から移ってこられた林敏彦さん

(45) Jaffee, Dwight M. and Thomas Russell, (1976) "Imperfect Information, Uncertainty, and Credit Rationing," *Quarterly Journal of Economics*, XC (90), 651-666.

(46) Tsutsui, Yoshiro (1984) "Credit Rationing and Competitive Loan Markets: A Comment on Jaffee-Russell Model," *Economic Studies Quarterly*, 35(3), 269-276.

私の修業時代

がスタンフォード大の Ph. D. だから見てもらいなさい」と言われて、林先生に英文の書き方を教わった。林先生は有名な雑誌である *Review of Economic Studies* にも業績のある理論経済学者だったので、論文の内容もチェックしてもらった。QJE に送ると、あなたの論文は正しいが、別の著者から同じ内容の投稿があつて印刷中だ。したがって、採択できないとの知らせ。その論文を見ると、第1のケースは確かに同じだが、第2のケースへの言及がなかった。自分の論文のほうが良いのにと残念だった。仕方なく『季刊理論経済学』に投稿すると、あなたの論文は間違っているとのレフェリーコメントと共に不採択の通知が来た。その議論に反論し、QJE のエディターの手紙を添え、QJE に載る論文とくらべても、私の論文は付加価値があると主張して、やっと掲載にこぎつけた。レフェリー制度は基本的に良いと思うが、ひどいレフェリーもいるので、大変な目にあうこともあった。この論文の後、暗黙契約理論を用いた均衡信用割り当ての実証を経て、私の関心はひょんなことから、金融業の産業組織的分析へと転換する。しかし、それはまた別の機会に述べよう。

当時の阪大経済院の就職は楽だった。引く手あまただったからである。当時の阪大の助手のポストは、奨学金のような位置づけだった。義務は期末試験の監督だけ。試験監督は恐ろしく退屈だったが、文句をいえるはずはない。D1 の末に助手ポストの募集があつたが、先輩や同期生は皆売れてしまっていて、受験者は私だけだった。1 年上の小佐野さんは試験直前に滋賀大学に就職が決まっていた。それでも、筆記試験があつた。どうせ形だけだろうと思っていたが、面接で、出題者の小泉進先生に「君は国際金融の勉強はしていないの？」と訊かれた。採用試験には学部レベルで解ける海外部門を考慮した金融政策の問題が出ていたのだが、私には解けなかったのだ！「頭のリソースが少ないので、金融だけの勉強に集中しています」と開き直った。これは本心で、自分はニッチに集中しないと生きていけないとずっと思ってい

た。小泉先生は「今後、国際金融も勉強してください」と妥協して許してくれた。助手になって、就職のために動いてくれる指導教官として、建元先生に、畠中、蠟山両先生が加わり、3先生体制になった。

名古屋市大に就職

助手の年の夏ごろ、統計研究会の金融班からセミナーに呼ばれた。「新規貸出金利の推定」を報告してほしいということで上京した。私のような若輩者に指名が来るのは異例だった。これが人生初のセミナー報告である。帰りの新幹線で、セミナーに出席されていた根津永二先生から「名市大（メイシダイ）に来ないか」と誘われ、即、就職が決まった。その時はまだ普通の人事プロセスがどんなものか知らなかったのだが、今になってなぜ根津先生はあんなにコミットできたのだろうと不思議に思う。秋に大学に呼ばれて、学部長だった妙見孟先生の面接を受ける。「君のことも、君の業績も知らないが、尊敬する畠中先生との共著があるね。歓迎するよ」と言われる。うれしいような……ともかく畠中先生の偉さを改めて思い知った時だった。名古屋市大は研究者も研究環境も学生も素晴らしい大学だった。妻が大阪市大を離れられなかったので、大阪から1泊2日を通う。

回顧

こうして振り返ってみると、いろいろ回り道をして来たけれど、私は良い環境で育ち、折々に素晴らしい先生に出会って本当に幸運だったと思う。教育は人が全てである。しかし、まだ、この時は、プロの研究者としての出発点に立っただけだった。その後現在までの研究人生は、イェール大学への在外研究、研究書を出版して日経図書文化賞を受賞、大阪大学への就職というだいたい1990年ごろまでの7年間の昇り坂と、それに続く、不安神経症に悩まされ、やるべきことが見つからず、業績も出なかった2000年ごろまでの10

私の修業時代

年間、そして行動経済学と出会い、研究人生をやり直した20年間に分けられる。そこでは、私は独立した研究者として多くの優れた研究者と出会い、楽しい時を過ごしてきた。いつか機会があれば、その歴史をつづってみたい。

思うに、私の研究は我流で、プロとしては欠けるところがあった。だが、なんでも面白いと思って飛びつくのは、アマチュア研究者としては良い資質である。甲南大学を退職するにあたって、経済学をよりどころとしながらも、必ずしも経済学にとらわれないアマチュア研究者としての第3の研究人生を考えている。